

『大日本本草』の特徴的記述について —「応用」、「雑記」を中心に—

吉野 俊哉

はじめに

『大日本本草』（以下、本書）は、富山県南砺市（旧福光町）の谷村西涯（嘉永元年〈1848〉～大正12年〈1923〉）。以下、西涯）が明治30年代後半から晩年まで書き継いだ大著である。しかし、薄手の和紙や野紙に書かれた3,500枚を越える草稿は、未完のまま世に出ることなく様々な経緯から束ねられたまま現在は同市の松村壽氏が所蔵する。

当館では、令和4年に関連資料を含む本書草稿を借用して整理をすすめ、収載された品目の全体量を把握してリスト化すると共に、本書と一緒に断片的に残された関連資料を援用し編纂の経緯や過程等を推定した⁽¹⁾。また令和5年度後期特別企画展でその一部を初公開した⁽²⁾。

令和4年度の調査では全体像を把握し個々の収載品を概観したが、本書の特徴や資料的価値を明らかにするためには、更に具体的な内容に踏み込んだ詳細な分析が必要と考え調査を継続した。令和5年度は、西涯が本書の編纂で参照していたと思われる近世の博物的な本草書（以下、総称して近世本草書）や明治以降の植物研究書や図譜など（以下、総称して近代植物書）との類似点やその影響の視点から、記載の様式や内容についての考察を行った。

本書に収載される品目は、菌類や海藻を含め大部分は植物だが、その他に鳥獣魚介虫など動物類、更に米麦の加工食品や古銭まで含む多彩なものである。これは、本書が植物書の枠に止まらず近世本草書が対象とした博物的な範囲に依拠していることを意味する。そのような多様な記載や書名からの印象もあり、当初からずっと本書を明治以降に書かれた「本草書」と見てきた。しかし、確かに対象範囲は近世本草学のそれをカバーするものであるが、内容を仔細に見ると近世本草書の体裁を採りながらもそれを踏襲、模倣したものではないことがわかる。本書には学名の付記はないが、近代植物書と同様に科や属の分類を記し、先ず基本的に根や茎、果実などの形状や花の構造などを観察して詳細に記載している点は近世本草書と異なり、当時の植物学の成果を多分に参照していたことを示しているからである。

そして、本書が近代以降の明治30年代後半から大正初期に書かれていたことを考えると、記述の特徴を考察するためには近世本草書と共に当時の近代植物書からの引用や本書の内容への影響、そして西涯独自の視点を明らかにしていくことが必要と思われた。

その際、考察の手掛かりになると考える本書の特徴を2点指摘する。

1つは、個々の植物の解説のため細かな項目分けを行っている点である。10種類以上ある、多岐に亘る項目分けした見出しは、本書の特徴の一つだと思われる。植物ごとに全項目が記載されているわけではないが、異名や別名、植物の形状、繁殖地や栽培法などの情報を独自に集め、項目分けして記載している。そのような項目分けと内容の分析は、本書編纂の意図解明にも繋がるものと考えられる。

もう1つは、それらの中の「応用」、「雑記」とある項目の内容である。

「応用」は、主に「それが何に役立つものなのか」という視点から実用的な価値を挙げている項目である。食用の可否や薬効の他、用材としての適否などの内容で、全収載品目の約20%にこの記載がある。また「雑記」の内容は、その植物に関連した幅広い教養知識で、和歌や史書など古典籍からの引用や、語源などの他、西涯が見聞きした情報をメモ的に記した部分である。これは全体の約4.5%の品目に書かれている。

この「応用」や「雑記」には、西涯の関心が高かった分野や知識の広さが反映し、本書の特徴を示す重要

な内容と考えられる。

そこで小論では、先ず本書と近世本草書や近代植物書の具体的な記述との比較をから、引用の有無や類似点などの関連性を整理する。次に「応用」、「雑記」の内容の分類と分析を行う。最後に、これらを通して西涯の本書編纂の意図、本書の資料的価値を考察する。

なお、前述のように全体の収載品目は多岐に亘るが、2章は本書と近代植物書との比較を行った都合上、本書に収載される植物類のみを対象としたものである。

1. 『大日本本草』記述上の項目分けとその内容

先ず、近世本草書や近代植物書との比較と考察の前提として、予め本書の記載形式や記述の要点を整理して確認しておく。

本草書や植物書では見出しに続けて、ひとまとまりの説明文で書かれているものが多い中で、本書の基本的な記載形式は、内容ごとに項目を分けて見出しを立てて説明を書くものである。これは西涯独自の書式というわけではないが、意図的な工夫であり本書の特徴のひとつと見てよいだろう。

本書では、植物によって説明内容の長短は様々で、僅か数行の簡潔な説明で終わるものがあったり、逆に数頁に亘り様々な関連情報を盛り込んでいる場合があったりする。限られた字数で簡潔に説明するならば、ひとまとめの方が好都合だろうが、長文の内容を複数並べる場合には、予め見出しを付け説明を分けた方が読みやすくわかりやすい。特に長文の場合、項目を分けることは読みやすさへの配慮と考えられる。

この「読みやすさ」は、本書を公にする時に想定した読者層にも関係することだろう。本書「木類編 巻之壹」の冒頭には、西涯が編纂の意図を記した序文と「緒言」がある。そこに「此書ハ学者ノ為ニ編述セシモノニアラズ」、また「植物学ノ要ハ植物其物ヲ人世ノ用ト為シ即利用厚世ヲ主トシ」とある⁽³⁾ことから、予め植物等に特別の知識を持たない一般大衆層を対象にしたわかりやすく実用的な知識の伝達が、当初から目的にあったものと思われる。本書の「序文」、「緒言」の内容については、近代植物書からの影響にも触れながら後述する。

本書で使われている具体的な項目名は以下の通りである。[]は本文中の項目名、()はその表記の揺れ、または同類の内容に対して付けられた名称を示す。

- Ⓐ分類の名称の記載：[科]、[属]（族）
- Ⓑ植物名称の記載：見出しの名称、[別名]、[一名]、[漢名]
- Ⓒ生態や産地等の記載：[提要]、[提起]、[総説]
- Ⓓ構造や形状の記載：[根]、[莖]（枝）（幹）、[葉]、[花]、[果実]
- Ⓔ用途や利用等の記載：[応用]（効用）（功用）
- Ⓕ関連の情報等の記載：[雑説]
- Ⓖ生産や栽培の記載：[培養]（栽培）（栽培法）、[収穫]（採集法）、[適地]、[貯蔵法]、[製造法]
- Ⓗ品 種 の 列 記：[品類]
- Ⓘ挿絵図

Ⓐは、近代植物学が伝来する以前の近世本草書にはないものである。西涯は近代植物学を独学し、植物の配列に科や属による分類の必要性を理解していたことがわかり、本書では、植物を原則的にこれに従って配列している。「属」には「族」を当てた表記の揺れが散見された。

Ⓑは見出しに書かれた名称である。ほぼ全てが平仮名書きの和名だが、例外的に漢字表記だけのものもある。外来種は音訳したカタカナ表記だが、濁音や半濁音の表記には揺れがある。[別名]、[一名]には古名、方言名などが含まれる。[漢名]には見出し名称の漢字表記、本草書に載る生薬名等が書かれる。

名称では、西涯の興味が反映された例として、北方の植物（樹木）で別名にアイヌ名を付記している例が3点見られた⁽⁴⁾。この背景には、本書編纂中に日本が日清戦争で台湾、日露戦争で南樺太を領土としたことに感銘を受け、北方や南方産の植物への関心を高めていたことがある。そのため南方の産植物については、情報を求めて台湾や奄美諸島の関係部署に書簡を送っていたことがわかっている⁽⁵⁾。一方、アイヌ語の名称を記入したのは北方の植物への関心の反映と思われ、それらは何れも『北海道森林植物図説』（宮部金吾関／川上滝弥、裳華房、明35）からの引用と見られる。

㊦の産地等は、近代植物書では、具体的な地名よりも自然環境の違いによる繁殖地域の分布記載が中心である。それに対して近世本草書では繁殖地やその産地（旧国名）を挙げている場合が多いが、本書ではその両者が混在している。

近世本草書では全体の部位の説明よりも有用部位の説明が優先する。㊦で植物の形状を根、葉、花、果実などの部位に分割し総合的に特徴を記載するのは近代植物書の解説に倣うもので、西涯は先ず植物の実態を正確に記すことを基本とし、植物分類の知識に基づく各部位の形状についての説明を最初に書いている。[果実]では結実の状況や形状の記載が中心で、可食や薬効などの情報は「応用」に見える。大部分は根、茎、葉、花などと部位の項目立てがある一方で、図鑑の説明文のようにひとまとめに書かれた場合も散見される。これには西涯自身の関心や知識、植物による扱い方の軽重があったものと思われる。

㊦「応用」は「効用」や「功用」とした揺れも混在するが、これは西涯の執筆時期の違いによると思われる。「利用価値についての項目」という意味で[応用]と[効用]、[功用]の語を使い分けてはいないようである。用途や利用価値を具体的に挙げている内容が多く、食用の可否や薬効などには、民間療法や近世本草書が出典の引用箇所が見られる。明治以降日本に輸入された外来種には、近代植物書を参考にする他、新聞、雑誌、自身の見聞なども元にした様々な情報が含まれる。具体的な記載内容は、分類し現代語訳した摘要を後述する。

㊦[雑記]の内容は多岐に亘り、「応用」とともに本書の特徴となる部分だが、両者の区別が明確でない情報もあり、本来は[応用]に書くべき薬効や利用価値に関する内容がこの項目に書かれている場合も散見された。和歌や古典等からの引用等は具体例を挙げて後述する。総じて植物に関して西涯の幅広い教養が窺われる部分である。見方を変えれば、対象とする読者に伝えたい内容を盛り込んだ部分とも言えるだろう。

㊦「培養」は「栽培」、「栽培法」と揺れがある。一般的な栽培ガイドではなく、農作物の生産状況や増産を意識して書かれているものが多い。その意味では非常に実用的な部分で、農家向けの専門知識ではないが、農産物の知識を普及啓蒙する意図で書かれた項目のように思われる。内容の大部分は近代の農業関係書によるもので、特に作物の適切な「収穫」、畑作の「適地」、収穫した農産物の「貯蔵法」、そしてそれを用いた加工食品（ジャムなど）の製造についての知識までも含めた長文の記述も見られる。西涯は農家ではなかったが町や県の議員を務め、農政や福野農学校の関係者から具体的な教示を受けていた可能性⁽⁶⁾もあり、地域の農産物の増産や増収に繋がる情報を意識していたと思われる。

㊦は農作物や園芸植物に多く見られる、外来種や改良種の名称を並べてまとめて紹介した[栽培]に補足的な記載である。

㊦「挿絵図」は項目名ではないが、本書の特徴として挙げておく。草稿には西涯自身が和紙に顔料絵の具で描いた彩色写生画が900枚以上含まれる。一枚に複数の絵図を載せている場合もあるので、説明が書かれた植物のほとんどは絵図を描いていたようである。これについては、前出の「緒言」の中に「此書ハ居家日用ノ為ナレバ、精細ナル図ヲ挿入シテ読者ヲシテ一目其概略ヲ見ルコトヲ得サセムレバ大イニ便理ナルコトヲ識ルモ、其費用容易ナラズ。今之ヲ略シ僅ニ数百ノ縮図ヲ載スルノミ。」とあるように、本書の編纂に当たって絵図の重要性をよく認識していたことがわかる。

写生図には植物図鑑などから模写したような、花の構造や果実の別図を一枚に描いたものもあるが、多くは細部を細かく観察した近世本草書に見られる写生画に類似したものである。

以上を小括すると、一般向け植物図鑑では植物自体の生態や形状がひとまとめになった解説文が多い中で、本書では植物の形状に関する基礎的な内容に加え、関連する博物的な教養知識を項目分けして盛り込んでいく。そこにはわかりやすさを考え、専門知識を持たない読者層への啓蒙普及を意図していたことが窺える。

2. 本書の記述と近世本草書、近代植物書との比較

本章では本書の記述を、以下の4つの視点から近世本草書や近代植物書の記述と比較し、そこから具体的な特徴を考察する。

(1) 記載形式 項目分け

項目分けした記述の有無。

(2) 別名、漢名、方言名などの表記

本書に、見出しの他に異名など複数の名称が挙げられていることとの関連。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

本書の「応用」に相当するような実用的利用の記述や本書への引用箇所等の確認。

(4) 関連情報、教養知識

本書の「雑記」と同様の関連教養知識の記載や本書への引用箇所等の確認。

2-1 比較に用いた近世本草書

近世本草書では、その記載対象範囲の多様化もあり、文献学的手法で蓄積されてきた知識の考証を目的としたものの他、江戸時代中期以降に各地で行われた採薬の成果等を、生活知識や産物情報として蓄積した実用的なものが多数作られている。収載する内容も天産物を網羅する大部なもの他、生薬に限らない動物(魚介、鳥など)、植物(園芸関連)、石類(鉱物、神代石など)に分野を特化したものもある。

説明の項目分けを見ると、『古名録』(畔田翠山、序文は天保14年<1843>⁽⁷⁾)では史書や辞書、歌集、本草書から古名を引用する際に、見出し名称に続けて「漢名」(漢字での名称)、「今名」(現在の名称)、「一名」(別名)、「集注」(関連知識など)、「形状」(形態、薬効など)、の5項目を立てている。また『本草綱目啓蒙』(小野蘭山述、享和3年<1803>)では、名称の列記の中で他の書籍から引用した名称とその出典を「一名」と項目を立て載せている例がある。江戸時代初めに伝来し、近世本草学が依拠した中国明代の本草書『本草綱目』でも、生薬の説明では、「釈名」(正名、別名、名前の由来)、「集解」(産地や採取時期、形状等)、「正誤」(過去の本草書での記載の誤りを正す)、「修治」(薬用部位や利用法など)、「気味」(生薬としての特生)、「主治」(薬効)、「發明」(薬効などへの編者の解釈)、「附方」(処方)の8項目が、解説の必要に応じて項目分けされている。

小論で記述の比較に用いた近世本草書は、西涯が参照し、本書で引用の出典に多く挙げられる『大和本草』(貝原益軒、宝永5年<1708>)、『本草綱目啓蒙』である。『大和本草』は『本草綱目』の収載品目から日本に産しないものを除き、日本産や外来種を加えて1362種に解説を加えて編纂している。また『本草綱目啓蒙』は小野蘭山の『本草綱目』の講義を孫の小野職孝が整理したもので、何れも『本草綱目』を元にして博物的な近世本草学の成果を反映し、生薬に限らず広く国内の天産物を対象に考証を加え、実用的な価値の解説に重点を置くものである。広く流布し、当時の日本国内で知られていた天産物を網羅的に収載するもので、江戸時代の本草学全般の知識水準を知ることができることから選んだ。以下、それぞれ『大和』、『啓蒙』と略し、引用箇所にはそれぞれ<大和>、<啓蒙>と示した。

2-2 比較に用いた近代植物書

関連資料に載る、西涯が入手し参照していた明治以降の近代植物書は23種ある(表1参照)。これがすべ

てとは思われないが、西涯は、これらの書籍を用いて独学で植物の構造や科属の分類などを学んでいたようで、本書にはそこからの具体的な引用箇所も見られる。この点も踏まえて、小論では同リストから以下の(1)と(2)を、またその中にはないが本文中で引用がある(3)を用いて本書との比較を行った。

(1) 田中芳男等『有用植物図説』(東京大日本農会、明24)

見出しは和名で、後に漢名を付記する。解説文は項目分けせずにまとめて短く記述する。以下、『有用』と略し、本文からの引用箇所には〈有用〉と示した。

(2) 矢澤米三郎『帝国植物学提綱』(金港堂、明32)

見出しは和名で、植物ごとに章立てし、部位を「根」、「莖」、「葉」、「花」、「果実」、また関連する情報を「効用」、「附説」の7項目に分けて詳述している。それぞれの項目の内容は、同書の「模範植物記載ノ条項」で以下のように定めている。

- 一 根 質、生期、形状、所在等
- 二 莖 質、生期、位置、所在等
- 三 葉 部分、葉脈、排列、単複、全形、基脚、頭端、縁辺等
- 四 花 部分位置、花序、萼、花冠、鬚、心等
- 五 果実 種類、附、種子
- 六 効用 食用、衣服料、建築用、薬用、賞観用、工芸用等、附有毒、食虫等
- 七 附説 名称ノ由來、古來ノ伝説等、附、類例

この中で特に「六 効用」と「七 附説」には詳細かつ多岐に亘る長文の記載があり、本書の「応用」、「雑説」との関連や影響が窺われる。加えて本書と『帝国植物学提綱』とには、それ以外にも編纂の動機に繋がるような類似点が多数見られるので、別に節立てして本書への影響を後述する。以下、『提綱』と略し、本文からの引用箇所には〈提綱〉と示した。

(3) 松村任三『普通植物』(大日本図書、明34)

本文の引用に出典が挙がり、適宜内容を参照していたと見られる。見出しは和名で、後に漢字を付記する。解説文は項目分けせずに長文の解説が書かれており、特に植物の生育や利用、外来植物については原産や名称などの付帯的な記述が詳しい。同書の参考文献一覧には、『古事記』から『日本博物学年表』(白井光太郎、1908)に至るまで各時代の和漢史書、歌書、本草書などで100種以上を挙げている。『提綱』と同様、本書編纂の動機に影響したと思われる点を後述する。以下、『普通』と略し、本文からの引用箇所には〈普通〉と示した。

2-3 記述を比較した植物

本書に収載の植物は、「品類」の項に名称のみを列記したものを含めると4,000種類を超える膨大な数になるため、小論では具体的な記載の比較対象を絞り込んだ。その際、常見される日本在来種の主要な有用植物を「標準植物」として⁽⁸⁾収載した『提綱』を元にし、本書と『大和』、『啓蒙』にも共通して記載がある以下の8種を対象とした。[]は現行の科分類。

- ①「うめ」[バラ科] ②「くり」[ブナ科] ③「まつ(あかまつ・くろまつ)」[マツ科]
- ④「むぎ(こむぎ・おおむぎ)」[イネ科] ⑤「えんどう」[マメ科] ⑥「おにゆり」[ユリ科]
- ⑦「たんぽぽ」[キク科] ⑧「わらび」[コバノイシカグマ科]

2-4 具体的な記述の比較と考察

本節ではそれぞれに本書の記述を挙げ、引用や比較した文献との関連が見られる部分には下線を付け番号を振り、書き方や内容の具体的な比較を行った。また比較した文献からの出典記載があるものは引用箇所を示し特徴を整理した。

2-4-1 「うめ」

○本書の記述

うめ 梅

[提起] 落葉喬木 薔薇科ノさくら族培養植物ニシテ自生ナシ。

[幹枝] 高サ大ナルモノ三十尺余 囲五六尺枝繁茂シ。

[葉] 広楕円形又ハ印形ニシテ先ノ尖ルモノアリ。

[花] 隆冬ノ際ヨリ開花東北ノ寒地ニ於テハ五月さくらト共ニ花ヲ見ル。其色ハ純白青白淡紅重弁十弁種類数百品ニ及ブ。

[実] 梅雨ノ候、則チ六月中ニ成熟シ其形数十品アリ。各其名ヲ別ニセリ。早熟中熟晩熟等アリ。

[応用] ①材ハ堅クシテ赤色。其質緻密ニシテ紫檀ニ似、諸種彫刻物茶盆菓子盆等ノ製造ニ宜シ。②実世ノ遍ク識ル処日用ノ塩梅トシテ其用甚ダ広シ。実ヲ乾燥セシモノヲ烏梅ト名ク、③昔時紅色ヲ染ルニ紅花ノ添色剤トシテ必用ノ品ナリ。烏梅ハ染料ノ添色剤トスルノ外古方薬品トシテ赤白痢ヲ止メ汗ヲ止ト云フ。④梅花ハ百花ノ魁、実ニ郡莽ニ超越スル処アリ。観賞植物中ノ一位ニ置可モノナリ。又其樹形閑雅ニシテ花実共ニ一種ノ品位アリ。是ヲ画トシ彫刻物トシテ各雅致アリ。果実ノ酸ハ金銀細工ヲナス時之ヲ用ヘテ洗淨薬ニ使用ス。⑤梅ヲ多食スレバ齒ヲ損スト云。

[雑説] ⑥古ハ日本ニ於テ単ニ花ト云ハ梅花ナリ。後世ハ桜花ヲハナト云ト古書ニ云リ。支那ニテ単ニ花ト云ハ牡丹ナリ。梅花品種甚ダ多シ。蘭山氏ハ三百余品ト云方今ハ新花尚数多ニシテ殆ンド其数ヲ挙ル難シ。梅ハ旧曆ノ正月、花ヲ開クヲ常トス。冬月花ヲ開ク者ハ早ザキト云フ是ヲ漢名ニ早梅、冬至梅ト名ク。東海道各地伊豆ノ熱海、駿府、沼津等各地ニ於テハ各種ノ梅共ニ冬月既ニ充分ニ開花ス。北陸各地ニテハ遅キモノ四月中旬桜花ト同時ニ開花ス。⑦古昔支那或ハ韓地ヨリ伝栽ノモノナラン。今是ヲ確定スルコトカタシ。又日本ニ於テ自然生ノ梅アリト云フ。伊藤圭介博士ノ友人豊前ノ賀来飛霞氏ノ説ニ豊前宇佐郡西シイダニ村ノ山中ニ自生アリト云フ。又伊藤博士ノ説ニ帆足万里ノ説ヲ引キテ云フ。豊後国球珠郡森山中ニ自生数十株アリト云フ。⑧日本ニテ目下梅林ノ著名ナルノ地ハ大和月ガ瀬、武州杉田蒲田、山城ノ伏見桃山等ナリ。近ク梅実ノ利益少ナキニヨリ之ヲ伐採、他ノ有利ナル桑畑ニ変スル処多シ。数百年ノ名所モ或ハ名テ残ルノ憾ヲ来ス日アラン。梅ハ善良ナル果実ヲ植レバ原種ト略同品ヲ生ズルモノナレドモ、之ヲ実植セシ後他ヘ移セバ其果ハ同形ナルモ核子大トナリテ食用塩蔵ニ佳ナラズ。多数ノ実見説ナリ。数千年栽培シ来レルモノ近年其品類甚ダ増加シ幾百種ノ多キニ及ベリヤ。枚挙ス可カラズ、或ハ三四百種ナラント云フ。

[うめ別名] ムメ万葉集 ウメ和名抄 コノハナ ハナ ニホヒグサ カゼマチグサ カザミグサ カバヘグサ ミドリノハナ カトリグサ ハツナグサ ツケクサ イヒナシノハナ 以上古歌

[梅花名] 百花魁 花魁 世外佳人 鶴膝枝 清友 清客 官長 羅浮仙 羅浮仙子 索笑客 東閣 冰栴 梅伯華 冰姿 玉骨 大庾公 自春知 香雪 冰肌

[梅実名] 雪華 栴果 含酸 梅栴 蠟果 嘉実 含酸子 止渴 乾療

(1) 記載形式 項目分け

[提起] はその植物について話題の提起といった意味の概説部分である。ここではそれに続けて部位ごとの形状や特徴等を項目ごとに記述している。『提綱』では [根]、[莖]、[葉]、[花]、[果実] の5項目で詳細な説明を載せる点で類似するが、本書への直接の引用箇所は見られない。

(2) 別名など

本書では和名と漢字表記のみ書かれる。『啓蒙』では古歌に見える梅の別称を10種挙げた後、更に [一名] の項目を立て、梅花と梅実に分けて古文献に見える異名を列記している。方言名は含まれないが、身近にあっ

2-4-2 「くり」

○本書の記述

くり 栗 クリ族

落葉喬木山中自生多シ。

- [幹] ①高サ三四十尺圍五六尺小ナルモノ、高サ四五尺ニ及能ク結実ス。
- [葉] 長楕円状按針形ニシテ大鋸齒アリ。
- [花] ②雌雄異花ニシテ六七月葉間ニ穂ヲ出シ長サ三四寸多数黄白色ノ毛状花柱ヲ簇ノ附下垂ス。山胡桃ノ花ニ似テ短小ナリ、是雄花ナリ。雌花ハ綠色ノ小球ヲナシ雄花ノ下ニ生ズ。
- [実] ③花後房彙ヲ生ズ。形円扁ニシテ一面ニ長刺アリテ毬状ヲナス。秋季ニ到リテ此刺毬自ラ裂ケ中ヨリ殻実出デテ落ナリ。刺毬ノ中ニ二顆或ハ三顆又ハ一顆ノモノアリ。殻実二顆三顆ノ中ニ肉ノナキモノアリ、是ヲ栗ノしやくしト云フ。漢名栗楔ト云フ。又刺毬ノ中ニ一顆アルモノヲ独顆栗子ト云フ。
- [栗品類] ④ハコグリ 近江ノ産ニシテ一毬七顆アルアリ、毬ノ形四稜ニシテ濶シ。啓蒙ニ出ヅ。
- [応 用] 栗実ハ凶年山民ノ食料トスヘシ。⑤其材水湿ノ地ニ用テ久シク朽ルコトナシ、建築用材トシ、又鉄道ノ枕木ト為シテ甚ダ良材ナリ。果実ハ食料ニ供料理ニ用ヒ⑥乾燥シ外皮ヲ去タルモノヲ搗栗ト名ケ縁喜物トシテ祝儀ニ用ユ、正月ノ儀式ニ橙毬布ト供ニ三宝ニ之ヲ盛ルモノナリ。味又佳ナリ。
- [雑 説] 栗樹ハ最モ長齡ナルモノニシテ洋説ニ二千年ノ寿ヲ保ツト云フ。⑦諸ノ果実ハ若木ハ其実大ニシテ樹老レバ実ハ小ナルモノナリ。然ルニ栗ハ老樹久ヲ経テ実大ナリ (大和本草)
栗樹ハ日本古代ヨリ有益ノモノト為シ、日本書紀持統天皇七年三月丙午詔令天下勸殖栗ノコトアリ。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では[葉]、[花]、[果実]の3項目で詳細な説明があるが、そこから本書への直接の引用箇所は見られない。[幹]については下線部①「幹高サ三四丈乃至五六丈アリ〈有用〉」が本書に類似する。近世本草書と近代植物書では何れも葉や花の説明は簡略だが、果実については食用とする種類、毬中の果実数の差などが細かく書かれている。

[実]の大部分は『啓蒙』の記述を元にするが、そのままの引用ではなく内容を要約しながら部分的に表現を変え、補足を加えているようである。具体的には、下線部②は「梅雨中ニ至リテ葉間ニ花アリ、穂ヲナス。長サ三寸許。至小ノ黄白色ナルモノ多ク著テ下垂ス。山胡桃ノ花ヨリ短小ナリ。〈啓蒙〉」の部分、それに続けて下線部③は「後房彙ヲ生ズ。形円扁ニシテ刺アリ。秋季ニイタリテ房彙裂出テオツルモノヲ上品トス。(中略)房彙ノ内、子二顆アルアリ、三顆アルアリ。三顆ノモノハ其中子多クハ皮ノミニシテ肉ナシ。コレヲ栗楔トイフ。俗ニ栗ノシヤクシト呼。〈啓蒙〉」を元としている。下線部④は「江州ニ一毬ニ七顆アルアリ。ハコグリト云、毬ノ形四稜ニシテ濶シ〈啓蒙〉」から引用したことがわかる。

(2) 名称など

『啓蒙』では[一名]の項に10種類の別名を挙げているが、そこから本書への引用はない。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

木材としての質や用途と、食用としての実の用途を分けて書いている。下線部⑤には「其材ハ神主ニツクル、此木土ニ入テ不朽、柱トスヘシ〈大和〉」などで、その一部を参照していた可能性がある。

加工食品に、皮を取って乾燥させた「搗栗(かちぐり)」を挙げるものは『提綱』、『普通』とも共通するが、前者では製法のみ、後者では「勝利ノ意ヲ寓シテ祝典ニ用フルコト古来其例ニ乏シカラズ」とあるだけだが、本書では下線部⑥のように生活の中での具体的な事例を補っている。

(4) 関連情報、教養知識

『大和』、『啓蒙』、『提綱』、『普通』では何れも語源に、皮が黒いことから「クロ→クリ」への転化を挙げているが、本書では語源には全く触れられていない。

下線部⑦は「凡栗ハ老樹久ヲ経テ実大ナリ。他ノ木ノワカキハ実大二、老テ実小ナルニ異レリ。〈大和〉」が元になっている。

2-4-3 「まつ」(あかまつ・くろまつ)

○本書の記述

あかまつ 一名めまつ

常緑喬木本島各地九州四国等平原山地ニ生ズ

- [幹] 高大ナルモノアリ、百二十尺余ニシテ圍三十尺ニ及フ。木皮赤色ヲ帯ヒ黒松ノ如ク大鱗甲ヲナサズ膚色美ナリ。
- [葉] 一説ニ葉ノ生存ハ一年又ハ五年ト云フ。針状ニ箇並生ス。黒松葉ヨリ柔軟ニシテ淡緑色ナリ。此葉ハ久シク保ツ、初発生ヨリ三カ年ニシテ落ツルモノナリ。
- [花] 四五月開花ス。花ニ雌雄アリ。雄花ハ黄色ニシテ新芽ノ本ニ簇生ス。雌花ハ微赤色ニシテ新芽ト共ニ生ス。其形小サク鱗毬ヲナシ後ニ肥大シ果毬トナルモノナリ。
- [実] 毬果ニシテ大サ一寸五分許リ、初青也翌年秋期ニ至リテ、成熟シ鱗片ヲ開キテ実子脱落シ鱗毬ハ数年樹上ニ止リテ落セザルモノナリ。

くろまつ 一名をまつ 黒松

常緑喬木中国及東海岸等暖地ニ産スルコト多シ。播州地方ノ如ク殆ンド他樹ヲ見ザル程ニ繁殖セリ。

- [幹] 最大ノモノアリ 赤松ニ比シ其幹直長ナラズ 外皮灰黒ニシテ皸裂ス。老樹ハ大鱗甲ヲナスモノアリ。
- [葉] 赤松ノ葉ヨリ針状長クシテ豪ク深緑色。
- [花] 雌花ハ数多ノ鱗片ヨリ成リテ花被ヲ有セズ。小球状ヲナシ新芽ノ頂ニ生シ雄花ハ単ニ雄蕊ノミヨリ成リテ細小ノ穗状ヲナシ新芽ノ下辺ニ簇生ス。黄色ヲ呈テ花粉ヲ放出スルモノナリ。雄花ハ花粉ヲ放出シ終レバ脱落ス。
- [実] 雄花ハ長ク樹上ニ止リテ松球トナリ二年ヲ経タル秋ニ至リテ熟ス。
- [応用] 観賞用として園庭に之ヲ植ること多シ。盆栽として各種草木中に於て最も主要なる品なり。或は盆栽中の王位を占ものとす。①材質ハ白色微紅ニシテ堅硬頗ル脂気多シ。棟梁、船艦、建築材料、橋梁、器械、近年此材を製紙の原料に供す。

- [松樹] 黒松赤松共ニ用途ハ略同フシテ赤松ハ黒松ニ比スレバ工作ヲ施スニ稍便ナリ。松材ノ用甚広シ。
- [応用] 大木は殿堂家屋ノ建築ニ必用カク可カラザルモノナリ。梁トシ棟トシタル。木板材用ユル処甚多シ。雨水ニ(欠字)セズ、水湿ヲ請キザル部ニハ之ヲ用ヘテ皆可ナリ。船材トシ器物ヲ入ルル他箱ヲ作ル可シ。松脂ヲ採集ス可シ。其益多シ。黒赤兩種共ニ脂液ニ異ナルトコロナシ。松根油ヲ取ル可シ。之ヲ採ルには伐木後数年ヲ経タル根株ヲ掘リ其松脂ノ凝結シタル部分ヲ割り取、鉄製「レトルト」ニテ是ヲ乾溜スレバ多量ノ油ヲ得ルナリ。其材ハ根株ニ限ラズ松板等不用ノ部ニテ脂油ノ多キ所ヲ乾溜スルニアリ。松脂ヨリてれめん油ヲ蒸留ス得可シ。松根松枝等ヨリ松煙墨ヲ得可シ。空気ノ流通防キテ密閉シタルハ小室内ニ於テ松根等ヲ焼キ其煙煤ヲ採集シテ製墨ノ用ニ供ス。又之ヲ漆器製造ニ用ユ。松ハ鑑賞トシテ之ヲ栽培スルコト最モ多シ。殊ニ風景林トシテ日本各地ノ勝景ニ於ケル若シ。斯ノ樹ノ欠クニ於テハ其風致ヲ減殺スル幾等ナルヤ知ル可カラズ、美人ノ衣裳ヲ脱セシ如シ。松ハ美術ニ於テ最有用ナル一ノ材料ナリ、絵画ニ於ルト蒔絵彫刻品衣

服ノ模様其他ニ之ヲ用ユル最モ多シ。又之ヲ年始嫁ノ祝画ニ用ユルトコロ多シ。盆栽ト為スモノ一般ニ之ヲ愛玩スルコト多シ、随テ一株ノ盆栽ニテ数千金ニ便スルモノ多シ。

[松樹雑記]

[松の別名] おきなぐさ 初代ぐさ ときはぐさ (豊喜草) 千枝ぐさ 千代木 十千代ぐさ すずぐれぐさ たむけぐさ わきましぐさ ことひきぐさ ゆうかけぐさ みやこぐさ くもりぐさ 延喜草 (ひきまぐさ) 百草 以上古歌

②まつの意義ハ、タモツ上略ニシテ、モトマと相通ズ、久シク寿ヲ保ツノ意ナルト云フ (大和本草)。又松ノ文字は公木ノ意ニシテ諸樹ノ長タルニ因スト云フ。松ノ国史ニ見ルハ、古事記日本武尊尾張国尾津の崎ノ一松之許云々是ヲ初トス。又後朱鳥四年天皇ノ御製ニ小松ガ下の草をからさねトよませ給フヲ御製ノ始ト言フ (万葉集) 古今要覧稿二百六十五⁽¹⁰⁾ そなれ松 ③益軒云、磯になれて久しき松なるへしと則い、そなれ松なりと云。藻塩草曰生傾キタル也、又ヒネタル松ヲ云とも云へり。

④松花一名松黄ト云フ、花粉ニコトナリ、此ノ黄粉ニ米粉ヲ和シ糕ヲ作ル松モチト云。食物本草ニ曰ク松花毒ナク心肺ヲ潤シ氣ヲ益シ風ヲ除ハ血ヲ止ム。亦酒ヲ醸ス可シ。扨取りテ酒ニテ服スト云フ。盆栽用として採集するには各地共々其品多しと雖も播州姫路付近の山野に生するもの佳なり、又栃木県茨城県等にも良品を産す。山陽道各地にても佳良ノ種多し。松盆栽の肥料ニは或人の説に蒟蒻をむし便理ニして有益なりと云ふ。適宜ニコニヤクを切りて根元ニ埋るなり。又麦と烏賊とを水に浸して腐敗せしめたる者も効あり。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では赤松について [莖]、[葉]、[花]、[果実] の4項目で詳細な説明があるが、そこから本書への直接の引用箇所は見られない。本書の記載内容はその他の植物学書、図鑑などを参考にしたものと考えられ、赤松と黒松を分けて記述している。

(2) 名称など

雑記で更に [松の別名] と見出しを付け、『啓蒙』から引用した古歌に見える別名を複数挙げている。但し、本書で『啓蒙』にあった「さしまぐさ」が欠落しているのは、引用時の書き漏らしと見られる。下線部①は、『大和』からの引用部分。また下線部③の「益軒云」以下は「ソナレ松藻塩草曰生ヲ傾キタル也、又ヒネタル松ヲ云トモ云へり。愚謂磯ニナレテ久シキ松ナルヘシ、ソナレ松ナリ <大和>」が元になっている。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

木材としての利用価値、その他の生活資材の内容、食品に関する内容とが見られる。

下線部①は「材ハ堅微白赤色脂気多シ。家屋、船艦、棟梁等ノ建築ニ用ウ <有用>」を元にした内容と見られる。『提綱』、『普通』でも建築材、薪、松脂の含有について記述しているが、本書ではそれに加えてテレピン油 (松根油、てれめん油) の製法、松煙墨の製法を詳細に記載している点が注目される。これには日頃から写生を能くし画材にも詳しく、また本書をほとんど毛筆で書いていた西涯の関心が関わっていると思われる。続けて画題としての松の有用性に言及し、風景画の画題として、また蒔絵、彫刻、衣服ノ模様などに頻用されるとしているのも、自ら絵画を能くし、庭木や盆栽でも松を生活の中で愛でていた西涯の趣味が色濃く反映している部分であろう。松盆栽の肥料の詳細な記述は、長年の実践経験に基づくユニークな内容と思われる。

下線部④松の花粉の利用については、「食物本草ニ曰ク松花一名松黄ト云フ、花粉ニコトナリ、此ノ黄粉ニ米粉ヲ和シ糕ヲ作ル松モチト云。松花毒ナク心肺ヲ潤シ氣ヲ益シ風ヲ除ハ血ヲ止ム。亦酒ヲ醸ス可シ。扨取りテ酒ニテ服スト <大和>」が元になっていると見られる。

(4) 関連する情報、教養知識

下線部②は『大和』からそのまま引用する。その他に『古今要覧稿』から『古事記』、『万葉集』に見える関連する教養知識を引用している。

2-4-4 「こむぎ・おおむぎ」

○本書の記述

コムキ 小麦 マムギ 和名抄

小麦ハ大麦ヨリ小サク穂又小シ。下種ハ大麦ト同時ナレドモ熟スル待、大麦ヨリ略十日ノ後ニアリ。穂ニ四稜六稜ノ別アリ、赤穂ノ大小、芒ノ無有多少生熟ノ早晚、①本草啓蒙ニハ五十余种アリト云。

[効用] ②西洋ニハ是レヲ用ル猶日本ノ米ノ如ク、日用ノ食料中暫クモ欠ク可カラザルノ品ナリ。我国ニ於テ一般ニ未タ其ノ用法ヲ知ラズ、故ニ今用ユル処第一ハ醬油醸造饅頭蕎麦麵ノ合和ニ入ルコト其他饅頭ノ皮菓子トニ費スノ量少クナラズ。

おほむぎ 大麦

越年生草栽培植物。原産詳ならず。秋種冬長シ春秀夏実リ四時の気を備ふ。通常立春より百二十日にして収穫するを頂とす。小麦は十日斗り晩しと云。

[雑説] ③はだかむぎは近年朝鮮種を世間につくる、固大麦なれども小麦に似て皮なくして小麦の如し。

飯と為し麩と為し、饅と為し麩を打て切麩饅とす。河漏を食ふ法の如くにす。俱に佳なり。

右の説に依れば④裸麦は貝原先生ノ大和本草編纂中に朝鮮種を伝へて未だはだかむぎノ名無く単に小麦に似たる大麦と云々と記す。今考るに日本へは天和元禄の頃渡来せしものに似たり。今大正二年を(欠字)ること大略二百年を経る。此種は農民の益をなすこと非常に大なり。

⑤むぎノ意義を麦は「ムク」なり。縷々皮をむき去りて後に食ふが故に此の名ありといふ説あり
松村任三普通植物

⑥麦の古名に「カチカタ」といふ称あり。和名抄にも見えて搗難の意なり。大麦一石ノ目形通常二十七貫目以上三拾四貫目ニ及ブ。裸麦は一石三十三貫目ヨリ三十八貫目ニ及ブ。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では、大麦では「根」、「茎」、「葉」、「花」に分けているが、小麦では項目分けをせず、形状の他に小麦粉や発酵食品の加工を短く記載している。本書では大麦、小麦とも簡単な説明に終始する。下線部①は「小麦ノ品凡五十余种アリ(啓蒙)」の引用である。

(2) 名称など

[雑説] の下線部⑤に麦の語源を記載するが、この部分は『普通』の「麦の意義に就て調べ見るに、固より牽強付会の説なるべきも、麦は「ムク」なり。屢々皮をむき去りて後に食ふが故に此の名ありといふ説あり。又一説に、麦は味うまきが故の名にして「ムマ」と通ず。ムマキの中略ムキなりともいへり(普通)」を参考にしたものと見られる。下線部⑥は『普通』からそのまま引用したものである。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

外国人が多く居住する横浜などではパン食も広がるが、本格的なイーストを使ったパンの製造は大正から昭和にかけて始まるので、本書が書かれた時代には食パンはまだ一部であり、下線部②はそんな時代での一般的な用途を列記したものである。『提綱』、『普通』、『有用』では、それ以外にも大麦、小麦の用途では麦酒、麦芽糖、麩など様々な用途が紹介される。

(4) 関連情報、教養知識

下線部③、④は「裸麦」の伝来を特記した部分で、『大和』の「近年朝鮮ノ種ヲ世間ニツクル、大麦ナレ

ドモ小麦ニモ似タリ。皮ナクシテ小麦ノ如シ。飯ト為シ麩ト為シ糕ト為シ麩ヲ打テ切麩饅飩トス。河漏ヲ食フ法ノ如クニス。俱ニ佳シ。時珍云大麦亦粘リ有者糯麦と名ク、コレ近年朝鮮麦ト云モノナルヘシ〈大和〉を元にしており、裸麦を大麦の一種で朝鮮からの伝来種とする。

本書では、別項で明治以降に米国やヨーロッパから伝来の外来種麦の名称を列記する。これは、麦類を重要な作物としてその形状や生理の記述より、食糧穀物としての価値や理解を重視していたからと思われる。

2-4-5 「えんどう」

○本書の記述

えんどう 豌豆

越年生草又ハ一年生草。栽培植物、①原産地は亜細亜ノ中コーカサスの南ヨリペルシヤの間ニ産セルモノナラント云フ。茎は蔓性ニシテ卷鬚ヲ以テ他物ヲ纏絡ス。茎長サ三尺又ハ四五尺平滑。

葉ハ羽状複葉ニシテ三個ノ楕円形小葉ニテ成レリ。葉柄ノ先端ニ卷鬚ヲ有シ二個ノ托葉相擁シテ茎ヲ抱ク。花ハ托葉ノ間ヨリ出シ。分叉シ各梗頭一花ヲ着ク。萼鐘形ニシテ色ニ品類多シ。通常紫色ヲ呈ス。

〔応用〕 幼キ果実ヲ採リ莢共ニ煮食ス。種子ヲ採リ直ニ之ヲ食用ニ供シ又乾燥貯蔵用途多シ。豌豆通常莢石三十九貫目アリ。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では「根」、「茎」、「葉」、「花」、「果実」の5項目に分けて詳細に説明するが、そこから本書への直接の引用はない。本書では項目分けせずに茎、葉、花、果実の形状を記載する。下線部①で原産地に触れた箇所は「エンドウは英語にビーといひて欧羅巴にても特に栽培するものなり、然れども原産地は欧羅巴にあらず、一説には亜細亜の中に産したるものにてコーカサスの南よりペルシヤの間に起りしものならむと云へり」〈普通〉を元にしたと見られる。

(2) 名称など

『啓蒙』では各地の方言名の記載があるが、本書に引用はない。

2-4-6 「おにゆり」

○本書の記述

おにゆり 卷丹

宿根草。山野随地ニ生。円茎高サ三四尺、葉形莢状ニシテささゆりノ葉ニ似ズ密ニ互生ス。①深緑色茎ニ毛アリ。葉腋ニ紫黒色ノ珠芽ヲ生ス。秋梢ニ花アリ。花梗一二寸六弁ニシテ皆反卷ス。赤黄色ニシテ紫黒ノ点アリ。葉腋ニ珠芽アリ。むかごノ形ニ似テ紫黒色。地下茎ハ鱗状ニシテささゆりノ根ヨリ大ナリ。栽培品ニハ変種ノモノ数品アリ。

〔卷丹〕 野蔬類中ノ上等品ニシテ之ヲ栽培スレハ大イニ利益アリ。②農産植物ノ一タリ。販路広ク消費量多ク収穫好キモノトス。之ヲ栽培スレバ大ナル根茎ハ囲一尺二寸以上、目形百三十匁以上ニ及ブアリ。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では「茎」、「葉」、「花」、「果実」の4項目に分けて詳細に説明するが、本書では項目分けせず形状を記載している。下線部①は「多く互生シ深緑色。秋ニ至テ茎梢ニ花アリ。枝ヲ分テ開ク。六弁皆反卷ス。赤黄色ニシテ斑点アリ。子ハ已ニ夏中根葉間ニ生ズ。円小ニシテ零余子ノ形ノ如ク、紫黒色〈啓蒙〉の表現が最も類似しており、参照した可能性が高い。

(2) 名称など

『啓蒙』には各地の方言や古文献の名称が多数載るが、本書では引用はない。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

『有用』、『提綱』では鱗茎を食用にすること、花を觀賞することを記す。本書では下線部②に農作物として生産を重要視する内容はあがるが、利用について具体的な記載はない。

2-4-7 「たんぽぽ」

○本書の記述

たんぽぽは族 たんぱは フジナ 倭名類聚抄 クダナ 頓医抄 蒲公英

宿根草原野路傍ニ多生ス、根葉ハ羽状ニ分裂シ欠刻深ク叢生 早春叢葉ノ中ヨリ花梗ヲ抽クコト数個、高さ五七寸又ハ一尺、花ハ頂生一個ヲ着ク。萼片鱗状外部ノモノ短ク内部ノモノ長シ。花ハ黄色弁端尖細ニ五裂セル欠筒ニシテ大小重疊鱗次シテ菊花形ヲナス。子室麦粒状冠毛白色一柱長ク頭又ヲナシ、乾果ハ萼片反下シ裸牀上ニ絨毛絮冠ヲ有スル多数ノ種子円毬状ヲナシ後ニ飛散ス。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では「根」、「茎」、「葉」、「花」、「果実」の5項目に分けて詳細に説明する。本書では項目分けせずひとまとまりの説明文になっている。当時の図鑑などから形状を簡潔に引用したことを窺わせるが、出典は特定できない。

(2) 名称など

「フジナ 倭名類聚抄」は『啓蒙』からの引用。『啓蒙』には「ツツミグサ 越中」を含む各地の方言や10種以上古文献の別名を載せるが、本書には引用がない。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

他の本草書や近代の植物書には食用にすることが書かれているが、本書では食用の記載がない。

2-4-8 「わらび」

○本書の記述

わらび ヤマネグサ 古歌 ホドロ

宿根草。山中原野隨地ニ生ス。初生葉ハ卷曲シテ拳ノ如シ。長スレバ葉柄長ク三四尺。重複翼状ニシテ浅緑長サ三四尺、又ハ一ニ尺せんまいノ如ク叢生ス。根茎ハ地中深ク横行シ数十尺処々ニ於テ発芽ス。

〔応用〕 根ハ横行シ甚ダ長シ。多量ノ澱粉ヲ有セリ。冬春採掘、其用途広シ。根茎ニ黒色ノ太キ纖維、之ヲ乾シテ繩トナス可シ。能ク水湿ニ耐ユルモノナリ。澱粉ハわらびのこト云、繩ヲわらびなハト云フ。精製のわらびこハ餅ニ製シ菓子ニ用ヘ、又織物ノ糊ヘ加ヘテ大イニ其（以下、未完）嫩茎ノ乾シタルヲほしわらびト云フ。食用ニ供ス。

(1) 記載形式 項目分け

『提綱』では「根」、「茎」、「葉」の3項目に分けて詳細な説明がある。本書では項目を分けずに形状を簡潔に記載している。

(2) 名称など

「ヤマネグサ 古歌」、「ホドロ」は『啓蒙』から引用するが、その他の各地方言や古文献の見られる異名の引用はない。

(3) 利用価値、様々な生活関連事項

近世本草書、近代植物書共に、蕨の澱粉（蕨粉）と茎を乾して食用とする他、纖維を用いて繩にする用途

を記載する。葉柄の長さを三四尺としている点、この澱粉を「わらびのこ」、縄を「わらびなは」と呼ぶ点、縄にする根の繊維が黒色とする点などは、『啓蒙』を参照していると思われる。

近世本草書に限らず近代初期の植物書には、博物教育が普及する時期と相俟って植物個体の観察だけではなく、現代から見て生活との関わりを示す派生的な知識や教養に関する記載の多いものが見られる。本書に限らず『提綱』や『普通』にはその傾向が強く見られるようである。

全体を通じて多岐に亘る内容は、出典が挙げられていない多くの文献と共に西涯自身の観察、経験が元になっているようである。小論で比較に用いた文献などから管見した限り、本書での記載の傾向には次のような特徴が見える。

西涯が、『大和』や『啓蒙』の知識を引用しつつ民用厚生に資する知識を重視していたことは明らかである。ただ、古典籍や伝承からの引用では『提綱』や『普通』の方が本書以上に詳細な部分が多く見られる。西涯は「雑記」でそれらの内容から最大限に引き写そうとしたわけではなく、西涯自身の趣味や関心の反映、対象読者を意識して選択していたことがわかる。

「雑記」での古典からの具体的な引用は後述するが、参照文献からの孫引きも含めて西涯が参照していたと思われる古典籍からの引用は、表2にあるように、歴史書や和歌、文学書など多岐に亘る。そこには編纂の時期的な違いや興味の変化の反映もあったと思われ、一貫した意図は読み取りが難しい。

2-5 『帝国植物学提綱』、『普通植物』からの影響

『提綱』と『普通』からは、内容だけではなく「序文」や「緒言」に記された編纂の方針にも類似点が見られ、それらが本書編纂の動機に影響したと思われる部分がある。本節では執筆の動機や編集の方針を示した部分を比較し、その類似点から影響関係を考察する。

2-5-1 編纂の動機

『提綱』自序では、日本が西洋の自然科学を導入し文教の隆盛が見られることを称揚する。それに続けて、日本では天産物の正しい知識を軽視しその利用が進んでいない現状を慨嘆し、今その詳しい知識を養うことで国力の増強に繋げなければならないとする、編纂の動機を述べている部分がある。

(前略) 独天物ニ関スル智識ニ至リテハ、其浅薄軽浮、夙ニ識者ノ慨ヲナス、夫ノ人情浮華、日ニ利巧ニ走り、気品銷沈、月ニ卑野ニ陥リ、熱誠真摯ノ風ニ乏シク、天贄利用ノ途ニ暗ク、邦産為ニ精ナラズ国力為ニ張ラザルモノ、蓋シ偶然ニアラザルナリ、其根替ヲ今日ニ培フニアラズバ、何ヲ以テカ能ク其美果ヲ他日ニ収ムルコトヲ得ン(後略) <提綱/自序>

『普通』では編纂の動機に、適切な知識を備えた書籍がない現状を嘆き、植物に関する知識普及の教育を補うためという意志を示している。

吾人の家庭に於て植物に関する平易の読本あるを見ざるは、是豈普通教育上の欠点にあらざらんや。

庶幾くは本書其の一端を補ふに足らん歟 <普通/普通植物の編纂に就て>

西涯もまた、本書木類編冒頭の序文で、植物に関する情報普及の現状を遺憾とし「在来種、外来種を含めて現在日本にある植物の戸籍簿となるような書籍」の編纂を目的に据え、微力をも省みず、断然実行するという宏遠な動機を述べている部分がある。

目今日本に行るる植物記載の書籍は皆一部分を載せしものにして、日本国に於て産し又は外国より移植せし植物の、所謂戸籍簿なるもの未だ一部も之を見ることを得ず。実に遺憾に堪へざるなり。

「本書/序文」

そして西涯が本書を世に問い読者に教示を乞う言葉にも『提綱』との類似が見られる。

(中略) 自ら其学 力の微なるを顧みず世の為と信じて是を編述せしなり。誤謬の多きと品数の不備なるは読者之を補ひ之を刪正せんことを希望るところなり。「本書/序文」

予不敏、感ヲ時事ニ発シ、奮ヒテ天巧ノ一端ヲ搜リ、聊カ斯道ニ資セント欲ス、敢テ驚鈍ヲ呵シテ本書ヲ筆シ、之ヲ君子ニ質シ、之ヲ有識ニ問ヒ、以テ普通教育ニ於ケル萬一ニ裨補センコトヲ期ス、若シ其レ其闕漏ニ至リテハ、予ノ喜ンデ批正ヲ乞フハントスル所ナリ　　〈提綱／自序〉

その他に、米澤は前述の「国力」にまで言及する編纂の目的と呼応するように、書名に「帝国」と冠している。西涯は書名を「大日本一」とした。共にやや国粹的な感情や「大日本帝国」に対する称揚を感じさせる宏遠なネーミングには共通する思いがあったように思われる。

本書の緒言には「此書、日本列島四国九州北海道琉球台湾樺太等、我大日本領有地ノ植物ヲ分類記載し、専ラ其応用効能を詳説セントスルニアリ」という言葉がある。西涯がここで「我大日本領有地ノ植物」とした点にも、欧米列強へ追いつくことを目指す一方で、日清日露戦争で勝利して領土を拡大したことを踏まえた、国粹的な意識が高まる明治の時代性を反映した意識が感じられる。

2-5-2 内容の方向性と選択

『提綱』と『普通』、そして本書の何れでも、内容は「珍しい植物の紹介」ではなく、「普通に見られる植物の一般的解説を通して、植物の理解や知識の普及」を目指すことが示されている点にも以下のような類似が見られる。

一、本書載スル所ノ資料ハ之ヲ邦産ノ普通ナルモノニ求メ常ニ実物ニ就キテ之ヲ説示シ、努メテ紙上ニ天物ヲ学バントスル弊ヲ矯メンコトヲ期ス　　〈提綱／凡例〉

本書題して『普通植物』と謂ふ所以のものは他無し、吾人の周囲に鬱蒼として聳立する有用の喬木田園家圃に栽培して民用を資くる草木其の他普通の者を挙げて、(中略) 其の来歴性質効用等を説き而して記述の筆路終始通俗のならん事を務めたればなり　　〈普通／普通植物の編纂に就て〉

植物学ノ要ハ植物其物ヲ人世ノ用ト為シ、則利用厚世ヲ主トシ徒ラニ珍奇ヲ探求スルノ意ニアラズ。

「本書／緒言」

ここで特に、本書の内容や記述のスタイルが『提綱』から影響を受けた要因と思われる理由が2つ考えられる。

1つは矢澤と西涯に共通する、高山植物への関心の高さである。関連資料の中には、西涯が信濃博物学会の機関誌「信濃博物学雑誌」22号に掲載された白馬岳、槍ヶ岳方面の高山植物についての報文を抜き書きしたものが残っており、西涯は当時「信濃博物学雑誌」にも目を通していたことがわかる⁽¹⁾。

矢澤は長野師範学校で教鞭を執り、信濃博物学会発足時に幹事長を務めた中心メンバーであり、乗鞍や白馬でライチョウを調査し、高山植物を観察し新種を発見した博物学者であった。西涯との直接的接点の有無はわからないが、矢澤の活動を早くから理解していたものと思われ、登山と高山植物採集を通した両者の興味の方向性が重なって見える。高山植物への傾倒が、必ずしも普通植物の知識普及に直接結びつくわけではないが、西涯が矢澤の研究姿勢や『提綱』のスタイルに感銘を受け、それに倣った植物書の編纂を考えた動機との関連は否定できないだろう。

もう1つは、矢澤が目指す博物教育の普及と、西涯が本書に託した「植物を民用厚生に役立てるための知識」の普及にも動機が重なるようで、特に、西涯はその目的のために『提綱』の体裁から項目分けや関連があるようにする知識を記載する必要性を参考にしていただと思われる点である。

矢澤は、博物学を教える教育者として『提綱』は初等教育の資料、中等教育の学習に充てることを目的にしたことを凡例に書いている。一方、本書編纂の目的にも一般大衆に対する教養普及の意味があったとすれば、項目分けしてわかりやすく記載する構成や、植物自体の生態や形状に加えて関連情報の記述を充実させる意味で、本書の構成には『提綱』から大きな影響を受けていた可能性が考えられる。

例えば、『提綱』では前述のように「効用」の項目では、その内容を植物に関連する「食用、衣服料、建築用、薬用、賞観用、工芸用等、附有毒、食虫等」と決めているが、本書の「応用」の内容がほぼこれと同様なのは偶然ではないだろう。

しかし、『提綱』では植物の収載数自体が少ないため、記載された知識量が少ないのは否めない。そこで西涯は『提綱』に倣い「効用」の価値を認め、本書に収載する多数の植物に同様の記載を加筆し、質と量を充実させたものを作りたいという意図もあったのではないかと推定する。

そして、『提綱』の「附説」の項目には「名称ノ由來、古來ノ伝説等、附、類例」の内容を載せているが、これも本書「雑記」の内容にほぼ相当する。「応用」が『提綱』の「効用」に倣うものだとすれば、「雑記」の原型が『提綱』の「附説」にあったと見ることもできるのではないと思われる。

本書の「応用」、「雑記」の具体的な内容と記述の特徴は後述する。

また『普通』でも、項目分けはないが『提綱』の「効用」や「附説」をまとめ合わせた具体的な説明部分がある。記述量の多さ、語源、外来種の原産地に関する記述が比較的多い点に、本書との類似が見られる。『普通』から本書への明らかな引用箇所は僅かだが、西涯がこれを通覧しており、その内容の選択に影響を受けていた可能性は高いと見られる。

3. 本書「応用」の分析と考察

「応用」は植物を利用できるものか、どのように、どの部分を利用するとよいかといった直接的な生活との繋がり、民用厚生に資する内容が具体的に書かれている本書の特徴的な部分である。西涯の趣味、興味関心の反映、また実生活から得た情報などに基づく記述も見られる。

但し、後述の「雑記」と厳密に区別して書き分けたものではなく、内容に区別がつかないものが混在するのは、両者とも生活に役立つ内容という意識で書き溜めていったためと思われる。また、書き継ぐ中で内容の揺れが生じていったのかもしれない。

本章では「応用」の記載を、生活に関わる用途から「食用・薬用」、「生活資材用」、「趣味・観賞用」の3つに大まかに分類した。但し、一つのもの（植物）で複数の異なる利用価値がある場合は重複するので、その総件数は、「応用」がある収載品目数を超える。

それぞれの中で更に用途を分類して考察し、以下に該当する収載品名と記述の摘要を示す。

3-1 「食用・薬用」

(1) 食用、飲用になるもの 323件

植物全体、または実や葉、根など食用として広く用いられるものの他に、毒がないので可食なものなど、自身の経験に照らした内容が載せられている。調理法も「生食、煮る、茹でる、漬ける、炒る、焼く、加工する」など、可食部位の適切な可食時期（嫩葉、未熟／成熟果）や味（佳味、良くない、苦味、酸味など）といった西涯の感想が書かれるものもある。食べ合わせなど養生訓的な情報もあり、詳細な内容である。

○食用、飲用として挙げるもの（ ）内は本書の記載部分を現代語訳し、内容を抄出したもの。以下、引用部は同様。
ふゆのはなわらび（嫩葉を食べる）、ゼンマイ（嫩葉を塩蔵するものを青ゼンマイと言う）、わらび（根から精製したわらびこは餅にする。軟らかい茎を乾燥させた物をほしわらびと言い食用にする）、こぼのえいらんたい（食用）、はなごけ（削って茶にする）、しほで（嫩葉を食用）、あまどころ（味は甘く生食または煮食）、かたくり（掘り採って食用。澱粉はかたくり粉という）、こまかたけくろゆり（北海道では土人が根茎を煮て食べる）、うばゆり（鱗茎根を採って食用にする。苦味なし）、のびる（春に苗根を採り食用にする。夏秋になれば食べられない）、らつきやう（夏土用中に球根を塩漬け。これに酢と砂糖を加え数日して瓶、壺のまま炎日中に晒すこと10日ほど。美味しいものにしようとするれば砂糖を加える割合を

多くする)、あさつき(根茎葉共に食用。味はとても良い)、ワスレグサ(花を食用にする。開花していない物を探りすぐに使う)、やぶくわんざう(芽苗の一寸ほどのものを料理に用いる。味は甘美)、ぎぼうし(ぎぼうしの類は春に葉柄が柔軟な時採って食用にする)、たちてんもんど(地下の塊茎を取って糖蜜で煮て菓子にすることが多い)、おらんだきじかくし(柔らかい茎を食用)、きじかくし(稚苗を食用にする。西洋では美味とする)、いてふ、カヤ(核果は食用)、てうせんまつ(果実は煮て食用、味は胡桃に似て生食)、フユザンシャウ、しやがたらゆ(果肉の汁液は柚酢と称し酢に代えて料理に用いる。果皮は砂糖漬け)、ナルト(味は酸っぱく美味とは言えない。房を取って砂糖を加えて、また果汁を氷水や冷水に加え飲用)、ナツミカン(果物として最も優等)、ダイダイ(実を搾って食用酢に代用。結実初年のものを薄片にして砂糖煮で菓子にする)、レモン(未成熟果実は砂糖で煮て菓子に用いる)、くねんぼ(生食)、寧波きんかん(10月以降採って料理に用いる。炭火で乾燥させて菓子を作るにも良い)、ながきんかん(実は砂糖漬けで佳味。生食も良い)、みかん(生果。小型の果実は砂糖煮にして菓子)、はりあさがほ(柔らかな実は食用)、ひるがほ(根を食用にする。煮る、塩漬け、梅酢漬けにすると美味しい。嫩葉は煮て食べ、湯引き天日干で食べる)、さつまいも(塊根を蒸したり煮たり焼いたりしてそのまま食べる。細く糸のように切って料理に用いる。油で揚げれば大変佳味。薄片にして日光で乾かし粉末にして饅頭にする)、きんぎんれんか(嫩葉を食用)、つるな(葉を食用)、すべりひゆ(菜として食べる)、みづ(嫩葉、茎を食用)、からはなさう(柔らかい新芽は食用)、かんあふひ(花を塩蔵して吸物に用いる)、たて(良い種類のを塩漬けにして食用)、ほそばたて(この種は食用として味が最も辛く佳品)、そば(搗餅、粉餌、そばきりにして食用)、さんごじゆな、とうざき、おほははきぎ(葉を乾燥させて食用にすると佳味)、をかひじき(畑で栽培して柔らかい葉茎を食用)、のげいとう(葉は食用)、けいとう(葉は食用)、せんんにこく(葉や実子は食用)、ひゆ(葉を食用)、やなぎはみのこづち(嫩葉を食用)、ずずたけ(筍は食用)、かんちく(筍は細小なものは味が良く可食)、はりたけ(筍を食用)、はちく(筍は佳味)、をおしまそてつ(琉球、薩摩などで凶作の年に幹を搗き碎いて水に沈殿させれば大量の澱粉が得られる。皮を取って白仁を粉末にしてソテツ餅を作り食用)、サゴベイ(成熟期に幹の内部の軟質白色で海綿状の物を探って水に晒し精製したものが粒状の西国米)、ねむのき(果実の成熟したものは汁で酒を醸造できる。また砂糖が作れる)、おにはす(根は煮食すると良いという)、はす(根茎には多量の澱粉があり食用)、じゅんさい(春3月から秋に至るまで新芽を採って食用、生食または塩漬け)、みみなぐさ(嫩葉は食用)、スルガラン(花を採って三四日塩水に浸し、取り出して洗い、茶にする)、うくいすのき(果実は食べると美味。無毒)、あし(芽蘆筍は味がほろ苦く食用にする)、みのごめ(小粒を採って食用)、マコモ(実を花ガツミという。小粉米のように食用。新芽を食用)、コムギ(現在の利用の第一は醤油醸造、素麺、うどん、蕎麦のつなぎの他、饅頭の皮など菓子にする)、えのころぐさ(種をあをやぎと称し食用にする所がある)、あは(飯とし餅とし最も有益なる農産植物の1つ。酒精を製造。飴、団子、菓子に用いる)、ロゾク(精糖、澱粉製造、食料、葉は家畜の飼料となることである)、ライムギ(低温で他の穀類に適さない地方でも有益な農業植物である)、チガヤ(早春に小児が柔らかい穂を採って食べる)、じゆずだま、はとむぎ(外皮を取り粉にして食用)、たうもろこし(生のまま外包共に塩水で茹で苞を取り食べればとても甘美でおいしい)、メウガ(花は全部食用)、バナナ(果実は皮を取って生食する。味は甘美で芳香あり。菓子や飴などを作る。未熟は苦味があり食べられない)、まるばどころ(飢饉の年には山民の食料にすることも多い。根茎を切つてよく煮て流水に一晩浸せば苦味もなくなる。これを煮て或いは米飯に混ぜて食べる。味は良い)、かしういも、つくねいも、まんじゆしやげ(凶年にはこの球根を団子にして食べる。毒があり煮沸して悪液を水に浸出し毒を抜いて食用)、ふのり(小さなものは食用)、テングサ(トコロテン、寒天を作る原料)、とさかのり、おごのり(理の添え物で食用)、みる、あをさ、をごのり、あをのり、まつも(生または乾燥して食用)、かぢめ(賤民は食用)、ひじき(米に混ぜて飯にし貧民の糧を助ける)、ほそめ(貧民はこれを食料にする)、わかめ(茹でて、生、乾燥共に煮て食べる。生姜と酢で和えて食べれば腹痛にならない)、モヅク(春初に採集し乾燥させて食用。塩酢に浸して食べると味は清鮮)、かはもづく、カカオ(テオブロミンという窒素含有性の化合物と脂肪である。ココア、チョコレートなどは皆この種子の粉末から作る)、オランダみつばぜり(嫩葉と若い根葉を食用)、オランダみつば(嫩葉と柔軟な根茎を食用、葉に塩をかけて生食、または煮て食べる。緑の葉は毒があり食べてはいけない)、カンラン【橄欖】(実は生食、塩漬けや蜜漬で食べる)、てうせんぐるみ(種子を食用)、オニグルミ(実は食用で味はよい)、ちやらん(花を茶にする)、がんこうらん(実を食用、味は甘酸っぱい)、ヘビノボラズ(実の絞り汁で舎利別(註:シャーベットか?)を作る)、いつき(果実は食用だが美味しくない)、シラクチ(蔓の元

を裁ると水が出るのでミツヅルの名がある。樵が山中でのどが渇いた時、蔓を切ってこの水を飲む。味は僅かに甘いという。実は成熟したら食べられる)、**さるなし**(熟した果実は小児が好んで食べる。味は梨や葡萄、無花果などに似る)、**またたび**(実は食用で塩漬けにする。若く柔らかな葉は湯引きして食べられる)、**トウチヤ**(茶と同じように製して飲む。味は苦渋く美味しくない)、**チャ**(頭目を涼しくし酒食の毒を解くのは茶の功。長く服すれば脂を消す)、**サザンクワ**(柔らかい芽を摘んで茶の代用)、**ツバキ**、**ふゆあふひ**(葉は食用)、**ほうせんくわ**(花に多数の品種がある。葉は食べられる。種には魚を柔らかくする効果があり、魚を煮る際これを入れるとよい)、**やまあみ**(野菜に食用にする地方がある)、**ピハ**(果実は食用で美味)、**きいちご**(生食は甘酸っぱい味で美味しい)、**おほさんざし**(実は生食)、**くさぼけ**(果肉を食べる)、**からぼけ**(果実は食べられる)、**まるめろ**(生食より榎樽酒を醸造し、砂糖煮は生食よりも佳味)、**こりんご**(果実は梨に比べて渋みがあるが酒に醸造すれば味は良い。生食できる)、**りんきん**(果実を薄く切って天日で乾燥させ菓子にする。生食できる。林檎に似て甘く香気あり。渴きを治し酒病に効果がある)、**りんご**(実は生食または煮食する。醸造の材料にすれば美味な果実酒が得られる)、**かいどう**(実は食べられる。甘酸っぱく美味しい)、**ウラジロノキ**(実を食用)、**ズミ**(果実は生食できないが、よく熟したものを埋み火に入れて食べる。味は甘酸っぱい)、**ヤマナシ**(果実は成熟すれば食べられる。全熟していないものは茹でて食べる)、**なし**(主に果実を食用として栽培。酒に醸すと美味。乾燥した果実は美味)、**こうめ**(果実を食用にする。味は良くない。酸味が強い)、**ニハムメ**(実は食用。仁は薬用)、**ユスラムメ**(実は食用で京都では八百屋で売られている)、**ハダンキョウ**(果実は大きく味はとても良い。総じて上等で料理、生食、煮食する)、**すもも**(果汁でジャムを作れば佳味)、**アンヅ**(実は生食。糖蜜で煮て缶詰に詰め、果肉を乾燥させ料理に用いる。砂糖を漬けても佳味)、**アーモンド**(仁を食用にする。味は大変良い)、**さくら**(実を生食、味が変わりやすい)、**やまざくら**(実は小児の食物として毒なく甘酸っぱい)、**はしかん**、**ムクゲ**(花は食用)、**つくばね**(未熟な実は吸物。塩漬けの味は榎実のよう。嫩葉を食用)、**ナツメ**(果実は生食する。砂糖煮、蜜漬にすると味がとても良い)、**イヌビハ**(実を食用)、**イチジク**(果実は生食、半熟を糶塩に漬け。8割熟したものを乾燥させたものは佳味。成熟したものは砂糖煮、蜜漬けにする。砂糖煮の中では最も美味しいジャムにしても美味)、**ニクヅク**(果肉の核は主に調味料に用いる)、**あきぐみ**、**おはめなつぐみ**(果実は食用、酸味甘渋味があり美味しくない)、**とらぐみ**(果実を食用にする)、**つるぐみ**(果実を食用にする)、**グミ**(果実は食用)、**コセウ**(主に調味料に用いる)、**ノブダウ**(秋に成熟した実を食用にする。ジャムを作る)、**シラクチブダウ**(成熟した実でジャムを作る。酒の醸造を試したが数年貯蔵して大量の砂糖を加えて醸造しても酸味が強く醸造に適さない)、**ムベ**(実は食用、ジャムが作れる)、**あけび**(果実は食用で大変に美味。嫩葉、芽を塩漬けにして木の芽漬けという)、**みやまもみぢ**(樹幹に穴を開けて樹液を採集して製糖の原料とすることがあるが、日本では聞かない)、**さたうかへで**(樹幹に穿孔し汁液をとり砂糖を作る)、**からこぎかへで**(新葉を茶の代用にして「まいらちゃ」という)、**ハナイカダ**(嫩葉を摘んで山民は食用とする)、**タラノキ**(春に幹上の柔らかい芽を食用。独活の芽と似るといふ)、**オニウコギ**(葉は新出の時に採って茹で、酢醤油を加えて食べる。オニウコギの葉は味が劣る)、**ウゴギ**(嫩葉を食用)、**れいし**(味は乾燥したリュウガンと同じ。乾燥果実中の佳品)、**リウガン**(実は生食が最も美味しい。味は甘く微香あり)、**トチ**(実は食用、糯米に加えて餅を作れば淡黄色で少し渋みがあるが一種の香味)、**ハシバミ**(実中の仁を採って生食すると栗のような味)、**ニレ**、**まてばしい**(実は生食し、炒っても食べる)、**おほぼしひ**(果実は生食または炒って食べる。餅にして飢えを助ける)、**いちいがし**(果実は食用になる)、**くぬぎ**(実を粉にして餅を作る)、**コナラ**(実は水に晒して渋を抜いて食用)、**ブナノキ**(熟した実は食べられる。香ばしく栗に似る)、**クリ**(実は凶年山民の食料。佳味)、**やなぎいちご**(果実は食用)、**グーウスベリー**(果実は食用)、**スグリ**(生食、ジャム、ゼリー、蜜漬け、缶詰など用途が多い)、**あまちや**(葉を蒸して揉んで乾燥させたものを甘茶という。飲料や醤油の甘味付けにする)、**つるてまり**(葉は食用)、**あかなつふぢ**(花は茹でて酢味噌で食べられる。中国では半開きの花を塩湯に浸し蒸して乾燥させて蓄え食用)、**ナツフチ**(嫩葉は野菜として飯に加えて食べる。花も食べる。実はナタマメのようで、中の豆は焼いて食べる)、**エンジュ**(葉は発芽の時に採って茹でて食用)、**イハナシ**(子供が食べる。味は甘酸っぱく美味しくはない)、**リヤウブ**(春に嫩葉を諸国の山民は食用。味は悪くなく食べやすい。葉を蒸して乾燥させお茶にして飲む)、**おほばすのき**(果実は食べられる)、**コケモモ**(実は生食。塩漬け。砂糖漬け)、**キリシマツツジ**(小児が花を採って食べると少し酸味がある)、**オニグコ**(クコに同じ)、**クコ**(葉は食用)、**ムシカリ**(嫩葉を食用)、**ガマズミ**(子供が実を採って食べる)、**紅花スヒカツラ**(花を茹でて醤油と和えて食べる)、**コーウヒ**(世界中で嗜好されている

飲料である。含まれるカフェインはお茶と同様)、**コクチナシ**(花は熟未、成熟とも食用)、**オレイフ**(柔らかい果実を塩漬けにしたものを欧米人は好む。成熟した実を搾った油は食用として最高級)、**カキ**(果実は生食。乾燥したものはリンゴと並んで美味)、**ごぜんたちばな**(北海道では果実を食べる)、**はまぼうふ**(栽培し柔らかい芽を食用)、**にんじん**(西洋料理には不可欠。ゼリー、根を薄切りにして煮て乾燥野菜にする美味なり。塩漬けも可)、**みつば**(生食の他漬物。嫩葉は飯に入れて食べる)、**セルリアツク**(西洋では昔から各国で大量に栽培されてきた。日本でも近年栽培量が増えてきた。生食、獣肉魚の臭みをとる)、**せり**(沼地などに自生する品を食用)、**しゃくな**(嫩葉を食用すると佳味)、**ぼうふう**(嫩葉は食用にする)、**あめりかはうふう**(地下茎はにんじんに似て柔らかいうちに煮て食べると佳味)、**ひめびし**(実は食用)、**をとこよもぎ**(嫩葉を茹でて洗い、再び煮て食べる。味はヨメナよりも良い)、**かはらにんじん**(実子は薬用。嫩葉は可食)、**おほほもぎ**(新芽が出て高さ4、5寸のものを採って米粉と混ぜて団子を作ると美味。嫩葉を食用にするとまた美味)、**よもぎ**(新生の嫩葉を食用。水に浸して米粉を混ぜて再び蒸して団子にすると味が良い)、**のぎく**(嫩葉を食用。香りが良いが舌の上に一種の麻味を感じるのはこの菜の欠点である)、**はんごんさう**(春の初めに柔らかい苗を食用)、**てんぢくぼたん**(根塊は米国では野菜の一種として食用にする)、**あかばなたんぼぼ**(葉を食用。少し苦味があるが煮て食べる)、**きくいも**(欧米各国で盛んに栽培して根塊を飼料にする。煮焼したり薄切りにして酢を加えて生で食べる。沢庵漬けの中に入れて春に食べると佳味)、**ごぼう**(根茎を蔬菜として一般に食用)、**ごぼうあざみ**(嫩葉を米粉と混ぜて団子にすると佳味)、**てうせんあざみ**(畑に栽培して食用にするという)、**はまあざみ**(根を掘って食用。味佳)、**まあざみ**(田圃に栽培し食料にすることがある)、**へめあざみ**(柔らかい苗を食用にする)、**やまあざみ**(柔らかい苗は食用)、**つば**(葉柄を採り皮をむいて茹のように煮たり乾燥させたりして食べる)、**はんごんさう**(柔らかい苗を食用にする)、**しゅんぎく**(葉を食用にする。味は最も良い。佳香があり茹でて椀物の添え物にする。茹でて水にさらして固く絞り、花鰹、酢醤油をかけて食べる。花の全開していないものも葉と供に食べられる)、**きく**(料理菊の種は食用にすると香り味共に良い。葉は春から秋冬にかけて採って煮て食べる。種類によって苦い物があるが甘い種を選んだ方がよい。葉は乾燥して茶にすると色も香りも良い)、**いぶきだいこん**(味が辛辣で料理の調味に用いる)、**はつか(二十日)だいこん**(主に食塩と和えて生食、糠漬け、煮て食べる)、**ほそね【細根】だいこん**(糠漬け、また煮て食べる)、**なつだいこん**(糠漬け、また煮て食べる)、**もりぐちだいこん**(細く線切りにして乾燥させ塩漬け、または煮て食べる)、**さくらしまだいこん**(主に煮て食べる。質は柔らかく美味しい)、**みやしげ【宮重】だいこん**(沢庵にすることもあるが煮て食べるとおいしい)、**さじな**(塩漬けまたは煮て食べる。質は柔らかいが味は優美でない)、**さんとうさい**(煮食、漬物、肉類の添え、洋食のサラダにすると味はとても良い)、**むらさきかぶら**(酢漬け、塩漬け、煮食共に佳味)、**おうごんかぶら**(酢漬け、塩漬け、煮食共に佳味)、**三月大根**(生食、塩漬け、煮ても食べられる)、**あかな**(塩漬けが最も有名である)、**みづな**(葉は秋から春にかけて漬物にして食べることが多い。煮ても良い)、**たうな**(葉を食用にすると美味。塩漬けの根茎も食用)、**とくわかな**(植えて一ヶ月ほどで繁茂する。下の方から切っていく。調理法は他の蔬菜と同じ)、**からしな**(古い物ほど辛い。多食してはいけない)、**あぶらな**(各地で栽培される農産植物。冬から春にかけてよく食べられる)、**おほがらし**(茎葉の若くて柔らかい時に食用にする。春にヨモギが出る前によもぎ餅を偽製する時にこの葉を使って青色を付ける。種子は辛子のような味だが、辛子よりも辛い)、**ひめかんらん**(たまかんらんと同じだが、一層味が良い)、**たまなかんらん【球葉甘藍】**(調理法は各国の習慣により大いに異なるが、これを使わない国は希である)、**なづな**(古人は野菜の一つとして苗を食べた)、**わさび**(食を進め魚毒を殺す。佳良美味な香辛料)、**しろいぬなづな**(嫩葉を茹でて水に晒して酢醤油で食べる)、**けし**(柔らかい苗は佳味。種は煎って料理に使い粥や麺と併せて食べる)、**いかりさう**、**すずめのひえ**(種子を食用)、**あかなす**(実は西洋料理に使うが、普通に食用とすることは希である)、**しやがたらいも【馬鈴薯】**(若芽に一種の毒がある)、**なすび**(専ら果実を食用。重要な食用蔬菜。秋末に茄子を食べるなど云う説は過食すると胃腸を害するから)、**ふじにひとへ**(嫩葉は食用)、**しろね**(根を糶塩に漬けて香の物にする。煮たり吸物にしたりして食べる)、**しそ**(6、7月の間に葉を採り食用にする。また乾燥して冬に食用とするととても佳味)、**ごわえ**(秋から冬春に塊根を食用。佳味)、**くわい**(秋から冬春に塊根を食用。味は僅かに苦い。多食してはいけない)、**くろくわみ**(埋茎を食用。生熟共に佳味。食用に栽培する地がある)、**あづき**(未熟なものを莢ごと煮て食べる。近年は米価より高いのでベトナムからの輸入米に小豆を一割加えて炊くと味が良い。菓子用の製餡の多く消費する)、**しろなたまめ**(果実の未熟なものを採って皮ごと食用にする。皮と共に塩漬け味噌漬けにすると佳味)、**やぶま**

め（種子を食べる。若いものを葉と一緒に煮て食べる）、**いんげんまめ**（まだ熟していないものは莢ごと採って一緒に煮て食べる）、**ふじまめ**（まだ熟していないものは莢ごと採って一緒に煮て食べる）、**ふんどう**（この豆を使った素麺は透明で葛切りのように大変美味）、**ささぎ**（ささげのように莢は柔らかくないが賞味する。料理ささげという。熟した豆は赤小豆の代用）、**らつくわしやう**〔**落花生**〕（炒っても煮てもとても美味しい。また砂糖をまぶして菓子にする）、**なたまめ**（柔らかいものは莢ごと煮て食べる。また湯引きして塩漬けたものを味噌漬けにする。熟した実は味は悪くないが傷食して死ぬことがあるので食べてはいけない。焼いたものは最も人に害がある『大和本草』）、**だいず**（種子は味噌醬油豆腐湯葉菓子の原料）、**しろばなえんどう**（若い果実を莢ごと煮て、種子をとってそのまま食用）、**をたふくまめ**（未熟なものは莢ごと食べ、熟した後は豆を出して食べる）、**ほど**（根塊は食用）、**くさねむ**（葉を茶の代用にする、薬用。観賞用に栽培）、**げんげ**（水田の肥料として大いに有益なのは農家がよく知っていることである。若葉は食べられる）、**かはらけつめい**（葉茎共に乾燥させ茶の代用にする）、**くず**（葛粉を作る）、**くろくもさう**（生葉を揉んで味噌和えにして食用）、**とりあししようま**（若葉を食用）、**たいもんじさう**（嫩葉を食用）、**みつばつちぐり**（地下の塊根を食用）、**おらんだいちご**（生食、ジャム、成熟したものを採集して酒に漬ける）、**ふな**、**山ハト**、**トシヨリコヒ**、**ツチクレハト**、**ヤマトリ**、**むくわり**（食用として美味）、**ふか**（鮫類は何れも皮を取って薄切りし熱湯に入れ白くなったものを芥子、生薑、酢味噌で食べると美味。皮も食べる。生肉は蒲鉾）、**カラスウリ**（澱粉を多く含む。種を炒めたり油で煮たりして食べる）、**キグチ**（外皮を取って食べる。味は良くない）、**ぬのびきたけ**、**をしやうにん**（大根を擦って酢で和えて食べると酒にあう）、**だいこくしめぢ**（味は最美で広く食用）、**なめたけ**（美味で料理に多く用いられる）、**かうぞたけ**（味甘淡にして上品）、**くはたけ**（味佳）、**まいたけ**（食すれば微臭あり、塩蔵して煮食する）、**ひらたけ**（生食が最も良い）、**とらふ**（食用。乾燥させて貯蔵できる）、**ちだけ**（食用。味は淡泊で頗る美味）、**はりたけ**（食用）、**ははきたけ**（食用）、**やましやうろ**（味が良く料理の消費量が多い。缶詰品は高価）、**くろこ**（苦味あり。水に浸して苦味をとって食用）、**うづらたけ**（食用菌類では第一品。産後の児枕痛に煎じて服用する『大和本草』）、**いはたけ**（食用の際は熱湯に浸してきれいに洗い土石を取り去る。乾燥させ貯蔵すれば数年たっても変質しない）、**きくらげ**（生、乾燥共に煮て食べる）、**さらしなしようま**（嫩葉を煮て食用）、**つはぶき**（観賞用に栽培、葉柄を食用）、**バラゲー**（バラゲーと称して南米では日常必需の飲料）

（2）有毒なもの 36件

西涯が有毒植物と認識し、生活の中でその知識を普及させる意図があったものと思われるものである。植物全体ではなく、有毒部位を示した記述が多い。但し、例えば本来無毒の「へびいちご」を有毒とするなど当時の伝承に基づくものも含まれており、別に科学的な検証が必要であろう。また有毒だが適量を処方すれば薬用、毒抜きをすれば可食のとするものは、食用や薬用と重複する。

○有毒として挙げるもの

あおやぎさう、**ばいけいさう**（根を飯に混ぜ蠅に食べさせると死ぬ）、**はいどくさう**（葉を生で飯に混ぜ蠅に食べさせると死ぬ）、**まんじゆしやげ**（凶年にはこの球根を団子にして食べる。毒があるのでよく煮沸して悪液を水に浸出し毒を抜いて食用にする）、**きつねのかみそり**、**オランダみつば**（畑で栽培し柔らかな葉と柔軟な根茎を食用にする。緑の葉は毒があり食べてはいけない）、**どくうつぎ**（薬効を試す人がいたが、有毒で病気を治す効果はなかった。実を生で食べた小児は皆その毒にあたり死んだ。葉にも毒があり、葉を飯に混ぜて鼠に食べさせると死ぬので「ねずころし」と言う。中毒の兆候は、かゆみ痛みを覚え発熱が烈しくすぐに呼吸困難や痙攣を起こして倒れる）、**センダン**（実は薬用。葉は粉末にして菜園に散布すれば殺虫に有効）、**たかとうだい**、**サツマフジ**（花がまだ開いていないものを採り乾燥させて薬用にする。葉を揉んで水中に投ずれば魚が毒にあたる）、**しろばなぢんちやうげ**（実子はとても辛辣で咽喉を刺激する。解毒に半日ほどかかる。大量に食べ過ぎた者は斃死するという）**みやまはんしようづる**、**うまぶだう**、**やつで**（実と葉に毒があるという）、**じやけつ**、**ついでら**（薬用にするが花は毒がある）、**ハナスハウ**（花は毒があり食べてはいけない）、**ネチキ**（葉に毒がある）、**テウセンツツジ**（花は毒がある）、**マチン**（少量を用いれば強壯薬、食欲、消化器の弾力を調整する。神経の麻痺症状に効果がある。猛毒なので使用量には最も注意が必要）、**リウキウフジウツギ**、**キンギンボク**（実は害がある。庭園に栽培して観賞す

る者は注意が必要) **けぜり** (大毒あり、誤って食べれば死ぬ)、**てうせんあさがほ** (麻酔が発明されていない時代、果実を特殊な麻酔薬としたが今では用いない) **むらさきばな** (紫花)、**ひよどりじやうご**、**はしりどころ** (根茎は峻烈な有毒植物だが薬用。葉も有毒で効果は根と同じ)、**はだかほづき**、**いぬほづき** (有毒植物だが漢方では外科で重要な薬という)、**じやがたらいも** (若芽に一種の毒がある)、**きばなのれんりさう**、**まうせんごけ** (茎葉の味は酸苦峻烈有毒、外用すると疣贅が取れる)、**へびいちご** (この実を食べて死ぬ者がある。烈しい毒がある)、**せんになさう** (有毒だが、擦ってその汁と松脂を混ぜて膏薬を作り腫毒を消す)、**はへころしたけ**、**ばいかも**、**こきんばうげ**、**ふじうつき**

(3) 薬用となるもの 277件

内服、外用 (傷、虫刺され、駆虫) を含んでいる。植物の薬への利用は本草学の本来的な実学部分であり、これを重視しているのは、西涯が植物学よりも本草学も重視して学んでいたことの証左であろう。本書に記載された薬効については、近世本草書からそのままの引用や、出典が示されず「古方」とするものなど伝承によるものも含まれ、科学思想の普及によって本書が書かれた時代でも効果が疑わしいものがあつたと思われるが、西涯自身の実見を記載している点は興味深い。また、有毒とも重なるが害虫の駆除に関する実用的な内容も比較的多いようである。

○薬用として挙げるもの

ひのき (油液を皮膚病に外用)、**このてがしは** (果実は柏子仁といい古代には薬用)、**てうせんまつ** (実は海松子といい薬用)、**キハダ** (木皮は腎熱を取り、痢疾に良いという。種子の苦味は殺虫の効果がある)、**ミヤマツツジ** (近年これから一種のアルカロイドを発見し「ミヤマキシミン」と名付けた。効用はまだ明らかではない)、**ゴシユ** (子実は薬用)、**コクサギ** (根は薬用。熱瘡を治し、虫を殺す効果がある。枝葉根共に煮出し牛馬の虱を殺す)、**イヌザンシヤウ** (木皮は薬用)、**さんしやう** (木に付くアブラムシを駆除する効果がある)、**へんるうた** (毒虫類に刺されに葉を付ける効果がある。小瘡にこれを貼れば速やかに治るといふ。虫類を除く効果がある)、**きこくのき** (枳殻は古医方に大便を快く通し気を降ろす効果があるといふ)、**マルブシユカン** (果皮から採る油は医薬、食品、香水に用いる)、**ブシユカン** (実は古医方では痢病、痰病を治すといふ)
みかん (果皮は陳皮。乾燥させ刻んで生薑を加え、煎じて服用すれば咳に効く)、**やらば** (根塊は強力な瀉下剤)、**びじょうざくら** (根塊は強力な下剤)、**はいどくさう** (有毒で、この葉を生で飯に混ぜ蠅に食べさせると死ぬ)、**ねなしがづら** (茎を煮出し、夏に汗疹が出たら温浴すれば治る)、**ろくをんさう**、**いけま**、**ががいも** (生葉の汁を手につければ悪臭が消える。葉は腫毒を消し、果実の綿は止血になる)、**みづがしは** (茎葉とも苦く強壯解熱作用がある。胃腸病消化不良黄疸水腫痛風などに有効)、**せんぶり** (非常に苦く胃病に効果がある)、**いはりんだう** (健胃に偉効がある。食傷腹痛に服すとよい)、**へにさきりんどう** (味は非常に苦くケンチアーナの代用にす。各種胃病に効果がある)、**いちやくさう** (肺病を治し、傷を癒やす薬にする)、**おほうめがささう**、**すべりひゆ** (性寒滑虚冷の人は食べてはいけない。多年の悪瘡に磨り潰して付けると、二三日で治るといふ)、**カラムシ** (葉を乾燥させ揉んで取った綿は止血効果がある。生根は打撲腫痛に効果がある。生根をすりおろし痛みに貼れば関節の痛みを治す『本草綱目啓蒙』)、**あさ** (葉は麻酔、沈痛の効果がある。葉を乾燥させて一家で食べて二日間昏睡した者があつたのを私は見た。皆覚醒して無事だった)、**うしばさいしん** (根は乾燥させて薬用)、**つるとくだみ** (五臓の残穢を消化する。補益の効はないが効能が多い)、**おほははきぎ** (苗葉を搗き砕いた汁は赤白痢病に効果があるといふ。葉を煎じて目を洗えば熱病みを去る。下痢を止め、悪瘡を治すといふ)、**るうださう** (種の粉末は十二指腸虫や蛔虫その他の寄生虫を駆除する効果がある。生葉の汁も毒虫の刺され、蚤に喰われた腫れにも効果がある)、**いぬびゆ** (多年の悪瘡に磨り潰して付けると、二三日で治るといふ)、**みのこづち** (根茎を乾燥させ薬用。腰膝疼痛、閉経淋病血尿などを治す)、**さんきらい** (漢方で筋骨を強くして下痢止めの良薬といふ)、**さるとりいばら** (根は薬用、屠蘇酒に入れる)、**はす** (古方では精神を清寧にし虚を補う効能があるといふ)、**なでしこ** (種子は古方で薬用)、**せきこく** (古方で薬剤とし、今も清国に輸出)、**サイハイラン** (球根を磨り潰してできものに塗ればこれを除くことができる)、**おにのやがら**、**おほはくり** (根茎を火に炙り竹べらでつぶして糊状にし、アカガリの口に付ければよく治る。シランの根も同じく治療効果がある)、**はくろ** (根を炙り糊状にしてアカガリやノロに付ければ治るといふ『大和本草』)、**たんちく** (筍を乾かして薬用)、**るうだ**

さう(熱病の病人を看護する者はこれを持つか、揉んで鼻孔に似れば伝染しない『大和本草』)、**ダンチク**(筍は味が大変苦い。下緩剤、梅毒にも効果があるという)、**もろこしきび**(粉末を煮た糊を紙に延ばし貼ると閃挫腰痛に効果がある)、**はとむぎ**(湿痺を治療し疝疾の妙薬。顔にできた瘡に薏苡仁を服用すれば効果がある)、**たうもろこし**(ギリシャでは苞上の毛状花茎を煎じ膀胱の諸病に用いる。米国では毛糸状物エキスは利尿効果があるという)、**うこん**(塊根は薬用)、**はなめうが**、**バリン**(実は薬用)、**ひあふぎ**、**すいせん**(球根を薬用にする所がある)、**まくり**(『閔書』に「散碎微黒、小兒腹中に虫病有り少食能く癒える」とある)、**オランダみつばぜり**(薬用にするが、種子を小鳥にやると死ぬことがある)、**カンラン**【**橄欖**】(漢方医は、実は魚毒を解毒し、のどの痛みに効果があるという。陰干しにしたものは喘息を治す効果がある)、**とうくるみ**(実を食べると血の通りを能くし骨肉を柔らかくする)、**オニグルミ**(根皮は薬用。緩やかな下剤で大黃の作用に似ている。果実の外皮に一種の揮発油が含まれ、これに触れれば小瘡が出来ることがある)、**はづ**【**巴豆**】(実を圧搾あるいは煮出して採った油は最も峻烈なる下剤である)、**アカメガシハ**(葉枝を煮出して浴湯に入れればリウマチなど関節の痛みを治すという)、**ちやんちん**(早椿根皮は古方で薬用。新葉を食料とする説があるが、臭気が多く食べられない)、**にがき**(木材、葉共に味はとても苦い。これを薬用にする)、**ふしのき**(古薬方に五倍子は諸々の虫を治し炎症を除くという)、**ぎよりう**(葉枝は薬用)、**ナンテン**(小児の百日咳に効果があるという。葉は食毒を解すという説がある)、**めぎ**(古方薬に木を煎じて眼病を洗うと効果があり「目木」の名がある)、**あをき**(葉を煎じて腫れ物につけると有効)、**サンシュ**【**山茶莢**】(実は古医方に用いる)、**さるなし**(果実は古薬方に効能あるものとする)、**またたび**(猫が好んで食べ、猫の病気を治すという。芽葉は薬用だが胃弱者が食べると下痢しやすい)、**やぶからし**(葉茎を陰干しにして疥癬の薬に加えると有効『大和本草』)、**やまあぬ**(大便を通し月経を催進する効果がある)、**ほとさう**(利尿効果がある。肺気、水気を治すが適量を超えてはいけぬ。茎から滲出する白い液は薬効がある。実は蛇咬む腫毒に効く。古くは分娩催起用いられたという)、**ふうろうさう**(茎葉共に疝疾を治す効果があるので「げんのしやうこ」と言う。薬用には茎葉花共に陰干しにして煎じるか、粉にして丸める、どれも効果あり)、**ろーれる**(葉に僅かな青酸を含む。昔はこれから「ろーれる水」を採って薬用にした)、**シロダモ**(小児の白禿瘡に実と果肉を黒焼きにしてごま油で付けるとよく治る『大和本草』)、**テンダイウヤク**(昔は根を薬用)、**にくけい**(昔より樹皮を薬用。主な効用は衝動強壯薬で、僅かに収斂性がある。粉末にして駆風薬や他の薬に混ぜる)、**くすのき**(樟脳は第一に医薬として用いる)、**かなうつき**(根を生のまま煎じて服用すると瘡に確実な効果がある)、**しろやまぶき**(種を煎じて服用すれば咳に効果がある)、**ビハ**(葉は乾燥させて薬用。駆風発汗の効果がある)、**なにはいばら**(実は金櫻子といい古方薬で薬用)、**のいばら**(実を莖実といい漢方医薬に用いる)、**あんらんじゆ**(果実は痰、膈症効果があるという)、**おほさんざし**(薬用には核を取って果肉を用いる)、**からぼけ**(果実は古方では薬用。薬用には実を縦に二、三に切り乾燥させる。脚気霍乱嘔吐転筋を治す。脚気には未熟な実を採って種を取り煎じて服用する)、**まるめろ**(果実は壳薬の楹椀円に入る主薬である。痰を切るという)、**なし**(チフスに罹った者がこれを食べて出血し、遂に起き上がれなくなった者を見たことがある。やむを得ずこれを食べさせる時は、摺り下ろして布で漉してその果汁を飲ませなければならない)、**ニハムメ**(仁は薬用)、**アンツ**(核中の仁を杏仁といい咳止めに有効。日本の古方では便秘を治すという)、**すいみつもも**(中国では桃仁を食用にする。桃葉を煎じ入浴すれば霍乱吐瀉腹痛を治す『大和本草』。桃葉湯で身体を洗浴すれば、その夜は蚤が近づかない)、**うめ**(烏梅は薬品として下痢を止め、汗を止めるという)、**サツマフジ**(花がまだ開いていないものを採り乾燥させて薬用)、**ぢんちやうげ**(樹皮は外科薬)、**しわう**(峻烈な下剤で多量に服すれば嘔吐を併発する)、**ムクゲ**(花は食用、薬用)、**マツフサ**(幹枝併せて煎じ浴湯とする、通風、疝痛に効果があるという)、**てうせんごみし**(果実は滋補の効果があるという。古方には咳止め、肺病にも効ありとある)、**さねかづら**、**ホウノキ**(実を煎じて服用すると淋病を治すという)、**ニシキギ**(枝皮共に煎じて服用すれば心痛を治す効果がある)、**クロウメモドキ**(果実は薬用)、**ケンボナシ**(実は大小便を利し酒毒を解き嘔吐を止める)、**くは**(幹皮根皮葉は古来薬用)、**いうかり**(生葉を乾溜して精油を採取し香水や殺菌剤に用いる。樹皮は解熱剤)、**アカウ**(中国では実を蜜煎して薬とする)、**イチジク**(葉を煎じて服用すれば痔疾を治すというが効果は不明。果実は滋養があり慢性便秘の者が食べれば緩下の効果)、**くは**(幹皮根皮葉は古来薬用)、**シクンシ**(実は薬用。殻中の肉は生食できる。古く枯れたものは食べてはいけぬ)、**やどりぎ**(葉茎共に薬用)、**ニクヅク**(僅かな麻酔性がありアヘンの代用にする。小児の下痢に有効)、**あけび**(茎は古くは薬用。利尿作用がある。水腫にもよい)、**カウシウウヤク**(根を薬用。風邪を去り、諸虫を治すという)、**オホツツラフチ**(根を薬用。効果は防已に同じ)、**アラツツラフチ**、

ハナノキ（葉を煎じて眼病を洗う）、オニウコギ（根皮を薬用し五加皮といい腎虚を補い小便を澁らすという）、ウゴギ（根皮を五加皮と称して薬用）、リウガン（漢方では補薬剤強壯剤）、柘櫚葉ノボダイジュ（花を薬用）、エノキ（葉は漆瘡を治す。実を搗いて酒に混ぜて飲めば産後の身腫を治し、風呂に入れば中風を治す）、くぬぎ（樹皮は薬用）、しらかし（実は痢病を治す）、コナラ（乾燥させ忍冬と等分に合わせて煎じて服用すると腫れ物を治す）、カシワ（樹皮は薬用）、カシウウ（根は薬用。根には大量のデンプンを含む）、うまのすずくさ、ヤシヤビシヤク（実と葉を煎じて服用すると利尿効果がある。淋疾、婦人帯下に妙効）、白斑あぢさみ（花は薬用。古方では葉を乾燥させて瘡病の薬として煎じて服用）、うつき（実は薬用し君仙子という）、ミヤマトビラ（根は薬用。諸病に効き肥後では「医者タヲシ」という）、せんな（葉は下剤）、じやけついはら（薬用だが花は毒があり近づいてはいけない）、さいかち（実は薬用）、ハナスハウ（樹皮は古方で「紫荊皮」、花は有毒）、いうかり（樹皮は解熱剤に用いる）、ロスマリニユス（抜け毛予防に確然たる効果がある）、コケモモ（西洋では防腐清涼の効果があると言う）、アセミ（葉の煎汁を冷まして野菜にかけると殺虫の効果があるという。牛馬がこの葉を食べると酔ったようになるので馬酔木という）、オニグコ、クコ（古来薬用。根皮を地骨皮という。腎水を益す。実や葉を常時服すれば目を明らかにする効能がある）、マチン（少量を用いれば強壯薬、食欲、消化器の弾力を調整する。神経の麻痺症状に効果がある。猛毒なので使用量には細心の注意がいる）、タニウツギ（皮を取って葵皮を癬瘡の薬に混ぜる。『大和本草』）、カンボク（古方に外科で用いることがある。木材で歯ブラシを作る）、ニハトコ（木片や花を薬用。花は発汗効果がある。外用では折傷を治し筋骨を接ぐ）、紅花スヒカツラ（膿が出る悪瘡には、酒に浸して乾燥させたものを服用する。『大和本草』）、ニンジンボク（実は黄荊子といい、汁液を荊瀝といい薬用にする）、クサキ（漢方では蜀漆）、キナ（間歇熱、その種の熱病の特効薬）、カキカツラ（古方の医薬では蔓を乾燥させて使う）、クチナシ（実は黄疸吐血によい）、レンギヤウ（実は薬用。古医方では外科に用いる）、カキ（声がれ、魚中毒に効果がある。火傷に柿渋を塗ると効き目がある）、ほたるさう、むまみつば（根茎は下剤に効果がある。エキスを精製して利尿去痰の効果がある）、ほたるさう（漢方での柴胡の中では下品）、うどもどき（地下茎を乾燥させると香気を有する。漢薬の羌活）、びゃくし〔白芷〕（播種の翌年秋に根を掘り乾燥させて薬用）、かさもち（根を乾燥させて薬用）、はまにんじん（種子を薬用し、蛇床子という）、せんきう（葉はとても香りが高い。塊根は薬用。長期服用は不可）、とちばにんじん（人參が貴重なので代用品として薬用された）、さぼてん（『大和本草』には「霸王蕉」。乾燥したものを薬用にする）、しうかいどう（茎葉に含まれる酸味はシュウ酸カリで、昔は薬用）、おとぎりさう（金瘡に生葉の汁を付ければ止血効果がある）、フユイチゴ（民間薬）、ふじばかま（乾燥した葉は虫除けに効果があるという。北海道や奥羽の辺りではこの葉を厠に中に懸ける。嫩葉は可食と『大和本草』に記されるが、試してみたが硬くて食べられなかった）、ふき（根は苦い。幼児に生の蔕の根を刻み黄連、甘草を加えて熱湯を加えて飲ませ口の中の悪いものを吐き出させる。『大和本草』）、をたからかう（葉を乾燥しタバコの代用にすれば痰を除く効果がある）、しをん（昔は鬚根を一緒に採って薬用）、さうじゆつ〔蒼朮〕、かはらよもぎ、ひめよもぎ（苦みが最も強い。あるせむに似るが効能はやや劣る）、あるせむ（葉や花を健胃薬にする）、せめんしな（花を駆虫剤に用いると確かな効能がある）、あるにか（花を薬用）、きんせんくは（花を酢に浸したものは諸瘡悪性毒を駆散し、花の絞り汁は月経を促し、酒と塩を少し加えて傷や腫瘍つける。サフランの代用にする）、おほぐるま（古方書中にある青木香はこの土木香である。根を用いる）、をぐるま（古くは花を薬用）、べにばな（種子は下痢に効くが今では用いられない）、やぶたばこ（目に出た瘡を治す。根を切ってあぶり、細かくして飲む『頓医抄』）、をなもみ（昔はこの草を「至賤にして至貴の効あり」と称した。発汗排泄の効果がある。また子実は治熱に効果があるという。風疹のかゆみを治す。産後の諸病には葉を搗いて絞り汁を服用する）、あかばなたんぼぼ、ごぼう（種は薬として麻疹や発疹の薬に配合する）、かみつれ（今から30年前にはこの花を乾燥させたものを主に発汗剤に多用した）、つば（一切の毒を消す効果があるが特に魚毒、フグ毒を消す効果がある。生葉をすり潰して熱腫瘡創に貼れば腫を消す。打撲腰痛にも効果がある『大和本草』）、さはをぐるま（魚の骨が喉に刺さった時は搗きくずしてその汁を飲む）、あきのきりんさう（花には一種の香りがあり、乾燥すれば更に強くなる。味は苦く利尿強 壯瘡創の効果がある）、あかばなみしよけぎく（花を陰干し粉末にして蚤取りに用いると効果は確実。葉と茎で蚊や他の虫類にも効果がある。室内のゴキブリには花を粉末にして通り道に散布すれば来なくなる。新鮮な粉末ならば虫が触れば皆死ぬ）、からしな（古い物ほど辛い。多食すると血便痔疾になる）、たいせい（黄疸閉塞病に用いる。収斂瘡創の目的で外用されたが今では用いない）、くさのわう（生葉を揉んで付ければ瘡腫を消す。植物塩基「プロトビン」を含有）、ちやんばきく（植物塩基「プ

ロトピン」を含有する)、**けし**(果実に利刀で傷をつけると白色の液が出、数時間たつと固まった暗灰色になる。これを採取したものがアヘンで有効な薬物である。アヘンの効用は中国の薬物書に詳しい)、**こまぐさ**(植物塩基「プロトピン」を含有)、**いかりさう**、**はますげ**(球根を薬用。気を降し発汗効果がある)、**はしりどころ**(根茎と葉は薬用)、**いぬほぼづき**(有毒植物だが漢方では外科で重要な薬という)、**ししたうからし**(寒湿疝気を除く。虫を殺し、食を進める。多食すると目がくらみ瘡腫を生ずる。粉にして米糊と和えて紙に塗った膏薬を貼ると胃痛腰痛に効果がある)、**はくか**[薄荷](薬用で駆風胃病に効果がある。葉を煎じて漆瘡を洗うと効く)、**ほぼづき**(葉と根果実を搾って付け児の霜腫を治す。実は咳によい。妊婦は食べてはいけない)、**さるびや**(葉を薬用)、**れいりょうこう**(花実を薬用とし又香料に加える)、**かはみどり**(葉茎を「和ノ霍香」と呼ぶ。味は苦く健胃催経の効果がある『草木図説』)、**つるかこさう**(味は苦く渋い。傷を治すというが、今では用いない)、**いぶきじやかうさう**(強脳、鎮痛、通経に効果がある。蒸留エキスは胃腸の芳香剤。他の薬に加えて頭痛眩暈胃寒にする)、**やくもさう**(実を茺蔚子といい、苗は益母草という。共に古くから薬品)、**あたりさう**(茎葉共に薬用。南部では鼠穴に挿せば鼠が出てくるので「ねずみぐさ」という)、**こがねばな**[黄芩](地下茎は長大で深黄色。薬用にする)、**めばうき**(産後の身腫治療法に汁を飲む)、**きらんさう**(漆瘡を治す)、**ひきをこし**(薬用。腹痛を治し利尿に非常に効果がある)、**たちじやかうさう**(花葉全草薬用。チンキなどを作る)、**いぬごま**(葉花を浸剤とする。胃中の粘液による頭痛胸痛に効く。根茎は吐気に効く)、**をどりこさう**(群生しているものを川統断と呼んで薬用)、**しそ**(果実は霍乱嘔吐反胃を止める)、**れいりょうかう**(花実を薬用。又香料。花から香水が採れる。花実を香料に加える)、**おらんだびゆ**(子実を補骨脂といい薬用)、**ふんどう**(早常食すれば補益する。生で食べると全ての中毒に効果がある)、**くさねむ**、**くらら**(根茎を擦って煮出して栽培蔬菜の除虫薬として効果がある)、**はぶさう**(この葉は毒虫の毒を消す。種子は薬用)、**くず**(地下茎を薬用)、**まんねんぐさ**(毒虫刺されを治す。蚊に刺された後茎葉を揉んで付ければ痛みがおさまる)、**まうせんごけ**(峻烈有毒、外用すると疣贅を取ることができる)、**づたやくしゆ**(山民は喘息を「ヅダ」という。喘息の治療に有効でこの名があるという)、**きんみづびき**(葉茎および根共に収斂効果がある。下痢止め有効。多用しても害がない)、**ぶくれうさう**、**ふな**(下血を治す。胃腸によい。小児の白癩頭に黒焼きを醬油で付けるとよい)、**山ハト**(下血を止める。味噌で煮て空腹の時に食べると効果大きい)、**トシヨリコヒ**(下血を止める味噌で煮て空腹の時に食べると効果大)、**ツチクレハト**(下血を止める。味噌で煮て空腹の時に食べると効果大きい)、**カハガラス**(子供の疳を治す妙効)、**ナベゲリ**(喘咳勞咳を治す『大和本草』)、**なまこ**(黄疽に効く。腸は疣痔に効く。肺の病を治す)、**せんにんさう**(擦ってその汁と松脂を混ぜて膏薬を作り腫毒を消す)、**とらふ**(乾燥させて産後の児枕痛に服する『大和本草』濁りのある頻尿を治す)、**ブクリャウ**[茯苓](漢方医がよく用い、清国へ輸出している)、**れいし**(中国では延年の薬)、**あわゆきそう**(薬用として根茎を古医法に用いる)、**やましやくやく**(漢薬として宇陀芍薬、信濃芍薬と呼ぶことが多い)、**しやくやく**(根茎を薬用)、**はなかつら**、**わうれん**(わうれん属の根茎は皆苦味が強く薬効がある。普通の販売品はこの種に限られる)、**きんばいさう**、**さんしちさう**(止血効果あり。毒虫刺されに生葉汁を塗ると痛みが消える)、**ミルラ**(強壯薬)、**アングスチュラ**(強壯薬。虚性の消化不良、下痢に良い)、**てつせん**(根は薬用)、**ふいりば**[斑入葉]**ザクロ**(実皮は薬用。根皮は有力な殺虫効果がある。生根を採集して煎じて服用する(腸の虫を殺す特効あり))、**オニグルミ**(根皮は薬用。緩やかな下剤で大黃の作用に似ている。果実の外皮に一種の揮発油が含まれ、これに触れれば小瘡が出来ることがある)、**せんぶり**(根は堅く細く黄褐色。味は非常に苦く胃病に効果がある)

3-2 生活資材用

(1) 原料素材(搾油、香料、薬品原料、染料など)となるもの 103件

生活に利用し搾油搾蠟、染料、香料、化学薬品の原料となるものである。食用油の生産とその利用に関する知識も豊富である。この中で注目されるのは「染料」に関する内容である。化学染料の利用が増えていた当時にあっても自然染料への関心が高かったことが背景にあったようで、恐らくは西涯の家業が麻問屋で、若い頃から繊維や染色に興味があったことが関係しているものと思われる。同様の背景は、繊維植物への関心の高さにも表れているようである。

○搾油、香料、薬品原料として挙げるもの

はこねぐさ（葉柄の落葉したものを乾燥させて柄箒を作る）、ささゆり（花に佳香あり、香水の原料にする）、あかまつ（近年この材を製紙原料にする）、ベンガルストロン（レモン油を作る。クエン酸を取る。酸の含有は最も多い。馥郁たる芳香を楽しめる）、マルブシユカン（果皮から採る油は医薬、食品、香水に用いる。実を压榨した液で作るクエン酸は大いに用途がある）、をかひじき（古くは茎葉を焼いて灰汁をとって曹達を製造した。葉を箒にする）、やなぎはみのこづち（種から油を絞って食用にする）、たけ（製紙の原料）、かうすみがや（この種は揮発油成分を含有する）、おかるかや（一種の揮発油を含みこれを採集する）、チガヤ（穂の白絮を採って焰硝を加えて煮て赤く染めホクチを作る。葉で蓑衣を作る。製紙の原料にする）、おはしやうが（遠州見附浜松近傍に多く産出する。乾燥して外国へ輸出することが多い有益な産物である）、ふのり（糊にして紙を貼る、布を織るのに用いる）、つのまた（ヨード製造の原料として貴重で、多量のヨードを含有する）、かぢめ（乾燥したものを細切りにして羹に加えれば粘るが出る。賤民の食用にする）、しらき（果実から油を絞る。近江ではこれを栽培し油を精製する材料としたが、今では詳しくわからない。この油用いて時計の機械を潤滑にする。『本草綱目啓蒙』）、ハゼ（主実を用いて蠟を作る。木材も用途が多い。核子から油を採ることができるが、これは食用にはならず燈油とする。蠟は蠟燭を作る他に用途が多く、輸出特産の一つ）、ツバキ（実を採ってツバキ油を取る。婦女の頭髮に付けて光沢を出す。髪が粘って櫛が通らない時にこれを付ければ通りやすい。葉を焼いた灰は陶磁器の釉薬にする。葉を乾燥させて夏に蚊遣りに有効）、とうごま（下剤としてこの油を用いる。印色肉を作るには主にこの油を用いる。石鹼の原料とする。農家に栽培して利益が多い植物の一つで栽培方法は極めて簡単である）、ヤブニツケイ（実から蠟を採る）、ダモ（古来外科に薬用し「クロツツ」という。根皮は香気があり桂皮に代用する。実を搾って油を取る）、ウコンバナ（木曾の山民はこの実の核を絞って油を取り燈油とする。伊藤圭介先生の説に、この樹は洋薬の「サスサフランス」に大変に近いという）、あぶらちゃん（種子から油を搾る）、シロモン（実を搾って油を採り、燈火に用いる。木曾の山民がこれを用いる。花葉早春に咲くが満開時には臭気がある）、くろもじ（幹を採り外皮を漬けて楊子を作る。外皮、内皮に一種の精油と脂蠟を含有する。これを取り出し製品化し香油に混ぜる）、くすのき（樟脳は第一に医薬として用いる。樟脳製造の際に出る揮発油には数多くの用途がある）、フウ（木から出る脂を楓香脂といい形は松脂の如くで色は白く光沢がある）、ヤマグルマ（樹皮から鬚膠を作るのでトリモチノキの名がある）、シキミ（香水原料となる。線香抹香を作る時に香料として加える。木葉を粉末にして下等な香料に加える。枝葉を仏前に供える）、びやくだん（美しく香気ある檀香木を生ずるもので、香料に用いる）、ふいりば【斑入葉】ザクロ（実皮は染料とする）、いうかり（葉に佳香あり薬用。生葉を乾溜して精油を採取し香水や殺菌剤に用いる）、いぬしで（雑樹林に仕立てて薪炭材にする。油脂があり松明が作れる。皮を乾溜して油を得る）、むくのき（葉は木賊の代わりに木材の研磨に用いるのみである。果皮を乾燥して昔は石鹼のとして用いた）、アツニ（樹皮は極めて柔軟で、シナの木に似る。この皮を剥いて山民は物を束ねるのに用いる。皮を水に漬けて出る粘液を製紙に使う。加賀河北郡の村でこれを用いることが多い。越中の砺波ではほとんどを採って無くなった。北海道ではこの繊維を紡いで服を作る）、あべまき（樹皮をコルクの原料にする）、コナラ（樹皮を、獣皮を鞣すのに用いる）、ブナノキ（実1斗を搾って2合の油が採れ、灯油、食用油になる）、カハヤナギ（炭にして火薬に混合して用いる。皮は薬用で水楊子皮という。数十年前にこれから水楊酸（サリチル酸）を精製したが、今では化学の進歩で人工合成する）、えごのき（種実は油を搾って灯油にする）、オレイフ（成熟した実を搾った油は食用として最高級。外科薬品にも用いる。上等な石鹼を作る、機械の潤滑油、魚肉の油漬けに用いる。材質は硬く器具や箱類を作る）、イボタノキ（いばたという虫が付き、その巢の白い物質を採集して蠟を作る。硬く光沢があり虫白蠟という。外科用の薬品を作る。蠟人形作りにも用いられる）、プトウガキ（上等の柿渋が作れる）、びやくし【白芷】（播種の翌年秋に根を掘り乾燥させて薬用。香料香水に用いる）、おほほもぎ（初夏に葉を採って乾燥してモグサにする。伊吹モグサは木の葉で作る）、ひまはり（農産植物として栽培する所がある。種を採集して製油する）、いんどごむのき（幹に傷をつけ流出する乳白色液を製乾し、弾力性ゴムにする）、たうな（種子はあぶらなと同じ。搾油する）、あぶらな（各地で栽培される農産植物。種は製油の一大原料。近来鉱物油のために生産が非常に減った）、れいりようかう（花から香水が採れる。花実を香料に加える）、らつくわしやう【落花生】（100斤から通常30斤の油が搾れる。この油は美味しく、おれいふ油の代わりにできる。魚の油漬けを作る時これを使えば安くて味は劣らない。土質が適すれば収益が多い。石鹼の原料にできる）

○染料として挙げるもの

はまなす（根を褐色の染料、紺を染める下地に用いる）、こりんご（樹皮は化学染料が発明以前は多く染料にした）、ズミ（果実を乾燥させて粉末にして黄色の染料にする。食物に着色にも用いる。樹皮は褐色染料とする）、すいみつもも（根皮を染料にする）、いぬざくら（根皮を採り茶色の染料にする）、ヤマハンノキ（実は染料にする。この皮で漁網を染めるので「アミカハ」の名がある）、ヤマウルシ（葉を夏に採集して乾燥させ黒い染料にする。葉を煮出して鉄の液で下染めした布を浸すと美しい黒色になる。煮出した液にタンニン酸が含まれる）、ヘビノボラス（木皮を取って深黄色の染料に用いる）、めぎ（根幹葉皮を黄色の染料に用いる）、フクラシバ（古説にこの葉を水に漬けて腐敗させて色を取って染めるものをフクラ染という）、あぶらぎり（樹皮は染料にする。この実の油には毒があり食用油にしてはいけない）、たかつく【英名:マンフロウパーク】（幹皮は赤黒く裏面は暗赤色。煎出して以て赭褐色の染料にして、釣網等を染めると久しく変色しない）、オニグルミ（樹皮と葉は黒色の染料にする）、こぶなぐさ（全草黄色染料とする。八丈島産黄色縞はこの草）、うこん（塊根あり。黄色の染料に用いる）、カリヤス（主に黄色緑色の染料にする。人工染料発明以前はこれを大量に用いた。今は用いることは少ないが、安く生地を傷めないのので棄てるべきでない）、チシャノキ（木片を煎じて黄色に染める、筑前でチシャ染という）、クチナシ（黄色の染料にする）、みやこぐさ（花は香りがよく零陵香の代用。青色の染料になる色素を持つという）、たんから（幹皮は赤黒、内面は暗赤色で、これを煮出して赤褐色染料にする）、ふしのき（五倍子は多量のタンニン酸を含み染工の添剤に有用。暖地に五倍子を生じ利益を上げているところは多い）、こぶなぐさ（黄色染料にする。八丈縞の黄色は今もこれを用いるという）、むらさき（根茎を紫色の染料にする）、やまあひ（昔は葉に藍青を有するとして染料にしたが今では用いない）、まてばしい（樹皮は黒色の染料とする）

(2) 繊維素材原料（製紙、製縄、製糸など） 23件

繊維作物に関する情報を具体的に書いているのは特徴的で、布だけではなく製縄、製紙についても詳しい。西涯の住む南砺地方は古くから養蚕や和紙生産、麻布の生産が盛んであったことも背景にあり、繊維素材重視に繋がったものと想像される。

楮については「農家副産物トシテ利益多キ植物タリ」と書いていることにも、地元でのそれらの栽培や増産にも関心の高さが窺える。

○繊維素材原料として挙げるもの

わらび（根茎の黒い太い繊維を乾燥させて縄にする。水気にも耐える）、とどまつ（製紙原料にする）、あさ（専ら繊維を採って紡績し布にする。繊維を採った後ををがらといい、火薬の炭にする。紡績に使えない下等な物は紙の原料にする）、ねむのき（この毛は刷毛や箒を作ると強く、縄にすると耐水性がある）、ときはすすき（柔らかい葉で縄を作る。柔らかい穂で箒を作る）、マニラ大麻（繊維は耐久力に富み船舶用網索として最も有用品で、全世界で年間産出量は17万トンに達する。需要には不足しその価格は年を追って昇騰している）、かうぞ（紙、縄を製造し、布を織る）、つなぞ（農家でこれを育て、茎の皮から採った繊維は用途が多い。下等な麻の代用にする。殻を焼き炭にして発燭のホクチにする）、ガンピ（この樹皮に製紙に適した繊維がある。鳥の子紙ガンピ紙などとても良質な紙ができる）、キコガンピ（根皮も用いて紙を作る。樹皮も製紙の材料にする）、きだちこがんぴ（根皮を用いて紙を作る。その紙は鳥子紙のように上質なものができる。伊豆熱海地方で作るがんぴ紙は多くこれを原料にする）、ミツマタ（冬に枝を刈って剥ぎ製紙の材料する。地方では一大産物である。これで作る紙はガンピ紙に似て光沢が美しい。栽培すると利益が頗る大である）、オニシバリ（近時外皮で紙を作る。雁皮紙に及ばず日用下品の紙にする）、フヨウ（深秋に枯れる時木皮を剥いで製紙原料にする。皮の繊維は強く縄にして織って布にできる）、カウゾ（日本紙の製造原料に楮などの皮を剥いで乾燥させ水に浸して粗皮を取り、流水に晒して煮沸し搗きくずし多くの工程を経て初めて紙になる。農家の副産物として利益が多い植物である）、シナノキ（樹皮をシナカワという。古代は布を織った。今は編んで山人牛馬の脇腹にかけてハエやアブ避けにする）、アツニ（皮は極めて柔軟で、シナの木の皮に似る。この皮を剥いで山民は物を束ねるのに用いる。皮を水に漬けて出る粘液を製紙に使う。加賀河北郡の村でこれを用いることが多い。越中の砺波でほとんどを採ってなくなった。北海道ではこの繊維を紡いで服を作る）、ロヒニヤスー

ドアカシヤ（樹皮の繊維を索繩にする。製紙の材にする）、**カポック綿花**（この綿花は繊維が粗く節がなく繊維原料として毛氈や粗布を製造し上等なものではない。光沢と弾力があり湿気を吸わず、軽く浮力が大きい。寝具椅子の布団充填用として広く用いられ、特に戦艦用の布団として万一の危険に備えることがあるという。カポック綿花2ポンドを入れた布団は海上で11kgを支える浮力があるという）、**シサルヘムブ**（専らマニラヘムブの代用として船舶用などに広く用途がある。また莫莖を編んで窓掛けや卓子掛けにするなど用途が広い。ジャワ島で年間1000t～1500tを産する）、**しほくぐ**（夏秋葉を刈り採り縄やその他の用に使う）、**アマモ**（近年この茎葉から綿繊維を採る方法を発明した人があり、非常な国産品である。発明者は福島県人橋本與八郎（小名浜町水産試験場）である）、**くず**（茎皮を剥いで布を織ることができる。茎を水にさらして白くし、籠類を編む。これを「ふじごうり」という）、**あけび**（木芯を薄片にして紙にする）、**くは**（葉を採った枝は皮を剥いで製紙の材料にすると紙質が堅くなる）、**ムクゲ**（樹皮は楮皮のように製紙原料に良い）、**びろう**（繊維はブラシとして靴磨きを作る）、**とうしゆろ**（採れる繊維は水に耐久性があり、これで作った縄は用途が広い。箒、ブラシを作るなど他にも用途が多い）、**こあかそ**（茎皮に繊維がある。これから糸を作る）、**あかそ**（茎皮に強靱な繊維がある。これを採って苧麻の代用に使う）、**ポプラー**（材は白く、主にマッチ製造用。製紙原料に適している）、**おほぼぼだいじゆ**（材はしなのきに似て軽粗。木履を作る。木皮で縄を作ることができる）、**ボダイジュ**（樹皮の繊維を様々ものに用いる）、**つるうめもどき**（樹皮は白く強靱な繊維で北海道アイヌは縫い物用に使う。釣り糸にも使う）、**ほんてんくわ**（木皮繊維はおほぼぼんくわと同じく用途が多い）、**をほぼんてんくは**（皮から採集する繊維も用途が多い）、**とらのをもみ**（材は柔らかく繊維があり洋紙製造の原料にする）

（3）材料（食用以外の生活財、木工工芸品、建材など） 215件

ここでも多様な植物の利用法を紹介しているが、材木では材の色目や質に適した用途を豊富に記載しているのは本書の特徴であろう。西涯はその知識の普及と共に、林業生産の向上を意識し、関連する知識を重視しているようである。

具体的に挙げられた材木の用途では、製作に適した利用例に生活に密着したものを多数挙げ、材質の色目や耐水性、堅さなどによる建築材や日用木工品への利用の適否に詳しい。特に下駄（ノグルミ、ハウノキ、くぬぎ、あかがし、ブナノキ、キリ）や木履（キハダ、カラスサンセウ、にがき、ハリキリ、おほぼぼだいじゆ）、櫛（ツゲ、キツカフツゲ、ツバキ、もつこく、イスノキ、つりばな、ミネバリ、いぬしで）を作るのに適している樹木が多数挙がるのに目が付くが、これらの選択に西涯の生活感が反映しているように思われる。

○材料として挙げるもの

みづごけ（草木を遠隔地へ輸送する際の荷造りに不可欠）、**とくさ**（茎を塩湯で軽く茹で乾燥させたものは木工職などが研ぐ必需品とする）、**いてふ**（材は白色で木理が細密で漆器の下地にし、膳、折敷盆などの材に最も適している）、**ねず**（材は種々用途がある。土の中でも長く腐朽しない）、**いちい**（材は紫紅色で木理が美しい良材。箱類、欄間板、裝飾用に良い。昔から笏を作るので「サクノキ」という）、**まき**（良材で水土の中に埋めても腐らず、昔から棺材に良いという。木造船の漏水を塞ぐ）、**かうやまき**（日本産の木材で最も良質。耐水性があり橋梁の枕、船舶の用材とし、浴槽水桶などに適する。総じて家屋造作に良い）、**しらびそ**（建材）、**とが**（木理が美しく白くて建材に良い。速く成長したものは木理が荒く良材ではない。数百年を経たものに良材が多い）、**とらのをもみ**（天井、白木台、折箱、障子棧、輸出用商品の外箱、陶器磁器の荷造り用箱の材）、**もみ**（建築の良材。材は軽柔で白色。柱、板、箱などを作る。耐水性がない）、**こめつが**（多用途）、**つが**（白色で美しく建材ほか多用途）、**はりもみ**（多用途）、**たうひ**（日光では曲げものを作る。北海道で多産し建築の良材とする。船材にも用いる）、**カヤ**（北国産は大樹にならず中国西国産は大きい。材は白黄色で碁盤将棋盤を作ると良い。室内装飾建材に用途が多い）、**こうやうさん**（材質は柔らかく建材に向かない）、**あすなる**（建材に多様。耐久性がある。くさまき以上に湿気に強い）、**ひのき**（良材で材質は緻密で色は淡紅を帯び一種の香気がある。建築や装飾に最適。樹皮の檜皮は殿堂神社の屋根も用いる。立木のまま皮を剥ぎ取るが数十年の後には元のように外皮の層ができる）、**さばら**（材は

柔軟でやや黄を帯びる。耐久性があり水桶や箱類、建材として水回りに使うと最も良い。屋根を葺くのにも良い)、**くろべ**(木理が細かく美しい良材。建材として湿気で腐りやすい所に用いれば杉の数倍勝る)、**すぎ**(材は美しく耐水性があり小型木造船は多くこの材を用いる。酒造の桶材はこれのみを使う。日本間の天井板に最良。杉皮は屋根を葺き、外装など多用途)、**からまつ**(材は淡赤褐色で脂気が多い。木理は直通で質は柔らかい。板材の他、防腐を施し鉄道の枕木にする)、**ひめこまつ**(材は建築用に良い。質は白色で材芯は微黄赤を帯びる。木理は疎で柔軟。板障子類・漆器の木地、白杵に最適という。湿気に弱い)、**ごえふまつ**(建材として良材)、**はひまつ**(高山では薪の代用にする)、**はりまつ**(材は白色で用途はひめこまつと同じ)、**あかまつ**(材は白色微紅で堅硬。大変に脂気が多い。棟梁、戦艦、建材、橋梁、器械を作る)、**キハダ**(材は堅く建材、器物製作に用いる。木履を作る)、**カラスサンセウ**(木履を作る)、**きじよらん**(蔓は強く弓弦を作る)、**トウ**(茎を裂いて夏日用の筵、椅子、川床を作る。多用途)、**ピンロウ**(材は板や柱にする。繊維状の木理があり釘が打ちにくい)、**やし**(多用途。材は堅く縦に繊維のような筋があり紅褐色を帯びる。南洋諸島では全てのもの椰子樹に依って生活する民がある)、**ホテイチク**(幹を土中から掘り細根を取って研磨し杖を作る)、**クマザサ**(山民は葉と茎を一緒に刈り屋根を葺く)、**しの**(箒、竹籠類、筆管、キセルにする)、**にがたけ**(家屋の壁棧、釣り竿、笛、駕籠にする)、**やだけ**(昔はこの竹で矢を作った)、**ずずたけ**(籠を作る)、**かんちく**(幹を工芸にし、傘の柄にする。生垣、籬を作るのに良い)、**しばたけ**(孟宗竹に似て堅く花瓶、筆洞、扇子差、床柱などに珍重される)、**しちく**(用途が広く傘の柄にする。輸出竹材の一つで年々輸出が多くなる)、**はりたけ**(台湾ではこれを植え城壁の代わりにして敵を防ぐ。多用途)、**くれだけ**(この竹を火で炙った「白色爆竹」は用途が広く輸出も多い)、**はちく**(多用途。竹細工の良材。幹で火縄を作る。細い物は杖、こうもり傘の柄を作る)、**まだけ**(竹類の中で最も堅く、幹が厚く各種の工業材料に多用途。昔、弓や刀剣の目釘を作った)、**たけ**(建築用に壁土の下地作り、農家の稲架、籠に日用する)、**さるとりいばら**(茎の大きな物を携帯用杖にすると軽くて良い。外皮を磨き根の球状部を持ち手にする。明治39年11月18日に京都嵯峨の売店で買った)、**コバ**(葉でコバ団扇を作る)、**どろのき**(材は白色で多用途。近年最も利益が多い林産物の一つ)、**ばくちのき**(材は大変緻密なので顕微鏡の台を作る)、**うどのよし**(筆の義嘴に最適)、**あし**(葉を剥いで簾を作り、漁舎などの壁を覆い夏日は仮屋を作り炎暑を防ぐ。粗末な家屋の天井にする所も多い)、**ぶんござさ**(幹を煮て箒、籠、箸などの材料にする)、**めがるかや**(根は刷毛にして厨房器具の洗浄に用いる)、**かるかや**(根茎でタワシ、ブラシを作る)、**しのずすき**(屋根を葺くと耐久性があり、十分な厚さならば30年以上雨漏りしない。茎が大きく長い物は家屋建築の壁の下地を作る。簾や編んで苫にする)、**おにじゆずだま**(この実で作った念珠をイラタカの念珠といい、役小角の信者はこれを用いるという)、**じゆずだま**(児童玩具の念珠にする)、**バリン**(根は堅く長く腐敗せず束ねて物を洗う刷毛に代用する)、**たかつく** [英名: マングロウパーク] (材は堅緻様々な器具作る)、**かうえうさん** [高葉杉] (白色で微黄。木理がまっすぐで杉に似る。天井板。箱類、付木、マッチ材)、**かうやまき**(材質は軽軟で加工しやすい。耐水性があり造船水桶、風呂桶に良材)、**イイギリ**(多用途)、**ノグルミ**(材が白くて重くないので下駄足駄を作るのに良い)、**ハサグルミ**(白色の良材で多用途)、**てうせんぐるみ**(多用途)、**オニグルミ**(よく磨くと光沢を発する。大木で木理の細密な物は色々な細工に良い)、**アカメガシハ**(木目が美しく箱を作る。成長がとても早い)、**ユヅリハ**(脆弱で良材ではない。箱や挽物細工にする)、**ちゃんちん**(成長が早く木色は淡紅で木理が堅く裂き易い。湿気に弱く建材に向かない)、**にがき**(木履を作る)、**うるし**(漆樹は主に漆液を採取し、実から蠟を作る高価な一大要品)、**ツゲ**(材質堅く白黄木理が緻密で版木櫛、印材に良い。近年は輸入材が多い国内産より劣る。国内産は非常に高価で、これを植えれば多くの利益がある)、**たらえふ**(多用途)、**フクラシバ**(柔らかく曲斧の柄に良い)、**もちのき**(大きな材は挽物、印材に用いる。樹皮の内皮から鳥もちを作ることができる)、**キツカフツゲ**(質が緻密で淡黄白色。様々な彫刻の良材である。ツゲ材は印材や櫛を作る)、**あをはだ**(小器具や薪にする)、**くまのみづき**(農具の柄、楊子、薪炭にする)、**いつき**(材は強靱で重圧に耐える。大工石工などの鉄槌の柄を作る)、**みづき**(材は漆器木地を作る。炭や薪を作る)、**シラクチ**(蔓は強硬。信濃で木材を伐り木曾川に出す筏組みにこの蔓を用いイカダムスピの方言がある。山溪中の橋を編んで繋ぐのに用いる)、**またたび**(細長く割り裂き籠を作る。竹で籠を作る時はこれも交ぜて作る。竹に比べて強靱)、**ツバキ**(湿気に弱く腐りやすい。色々な細工に用いる。外皮を磨いて光沢を出し床柱にする)、この木の炭は蒔絵師に必用。葉を焼いた灰は陶磁器の釉薬にする)、**もつこく**(材は堅硬緻密割れにくく櫛、文具などを作る)、**いちび**(多用途)、**あをぎり**(材質は堅い。器者、箱、茶盆、琴など多用途)、**あわぶき**(多用途)、**やまびは**(材は木質がとても堅く多用途)、**ごんずい**(薪炭材)、**みつぼうつき**(木

釘、箸などを作る)、トベラ(多用途)、**こがのき**(堅韌で光沢があり木理が美しい。農具の犁を作り建材にする)、**ダモ**(材は建材。湿気に弱く反りやすく歪みが出やすい。質が美麗なので小細工に用いる)、**くろもじ**(幹を採り外皮を付けて楊子を作る)、**ビハ**(材は堅韌で折れにくい。これで作った木刀は打合いの音が悪いという『大和本草』)、**かまつか**(とても堅く、牛の鼻木にするので「うしころし」という)、**あかめもち**(多用途)、**くわりん**(淡紅白で木理は密で器物を作る)、**ヤマナシ**(文理があり細工に多用。梨樹と同じく建材に良い)、**なし**(堅く微紅色で建築用する。家屋の敷居、版木にすると良い。多用途)、**うめ**(材は堅く赤色。質は紫檀に似て様々な彫刻、茶盆、菓子器を作る)、**みやまいぬさくら**(多用途)、**しろざくら**(多用途)、**やまざくら**(材は堅く密で版木に用いる。盆や椀その他の器具類を作り、挽物、室内装飾材に用いる。薪炭材)、**あさぎさるすべり**(外皮を付け床柱に用いる。杖を作れば雅致がある)、**イスノキ**(材質堅く淡紅褐色を帯びる。建材、櫛にする。樹皮の灰は陶器製造に用いる)、**カツラ**(材は微紅色、鉛筆の材。湿気に弱い)、**チューリップノキ**(庭園へ植え観賞用とする。材は工業に用いる)、**シキミ**(挽物を作る)、**ホウノキ**(漆器木地、俎、下駄、版木、鉛筆 染木、寄木細工。木炭にして研磨用)、**もくれいし**(薪炭木灰を作る。家も回りに植え防風にする)、**つりばな**(櫛を作る)、**ヤマニシキギ**(弓を作る上材。真の弓の木の意味で真弓という)、**マサキ**(白色堅質。防火用に植えて益あり)、**びやくだん**(西洋では昆虫学用の筆筒を作る。中国では扇骨や玩具を作る。匏屑、鋸屑は薫料として有用)、**クロウメモドキ**(火薬用の木炭を作る材料にする)、**ケンボナシ**(淡赤色木理が美しい。堅く、磨けば光沢が出て机案などを作る。用途が多い)、**くまやなぎ**(蔓で馬鞭を作る。しなやかで折れることがない)、**ナツメ**(硬く板木に用いる。小細工など用途が多い)、**どしや**(この葉で飼った蚕の繭色は黄色く白くならない)、**アカウ**(宮古島では主に指物の材、また薪炭木灰の材料とする)、**くは**(黄褐色。美しく発色するのに石灰乳を塗って乾燥させ磨いて光沢を出す)、**グミ**(純白で堅く一面に枝節の凸がある。よく磨き光沢を出して携帯用の杖に最適)、**ゴシキツタ**(大きな物は山民が架橋の材料にする。木材は多用途)、**シラクチブダウ**(茎を細かく裂き北国の山民は雪中を歩く防寒用の脚絆などを作る)、**みやまもみぢ**(白色微黄堅質で緻密な良材。淡褐色堅質、楽器を作る)、**いたやかへで**(白色微黄堅質。緻密な良材)、**ときはかへで**(白色堅質)、**とうかへで**(褐色堅質中等材。小細工用)、**うりかへで**(白色微黄堅質。器具、荷棒を作る)、**かへで**(白色微黄で堅質緻密。装飾、箱、寄木細工、砲台、石版の縁など多用途)、**ちやうじやのき**(白色を帯びた黄色で堅質中等、小細工用)、**ハリキリ**(白木理が細かい。箱や木履を作る)、**トチ**(用途が多い。植林すれば利が多い木である)、**ムクロジ**(箱、机、天秤棒、紡車の止めを作る。実は念珠を作る)、**栴檀葉ノボダイジュ**(実は数珠を作る)、**おほぼぼだいじゆ**(材は軽粗。木履を作る)、**ボダイジュ**(セメント樽材に多用する)、**ミネバリ**(材は赤褐色で質は極めて堅硬。櫛を作る。木芯が堅実で彫って硯を作る。炭の良材)、**ハンノキ**(伐採後水に浸し乾燥させれば虫害が少ないが下等な建材。薪炭、薪にすれば益がある)、**カバノキ**(皮を切ってヨコに剥ぎ取り様々に用いる。桜皮のように粗皮を取って細工に用いる)、**いぬしで**(薪炭材。油脂があつて松明を作る。櫛を作る)、**くましで**(薪炭材)、**さはしば**(椎茸のほだ木にする)、**ケヤキ**(近代まで戦艦を作った。社寺仏閣建築の良材。木理木色が美しく風水雨露に堪える)、**エノキ**(板は反りやすく下等な建築材。薪にすれば良く燃える)、**アキニレ**(多用途。腐朽が早い)、**まてばしい**(柔軟で建築材)、**おほばしひ**(建築材、櫓に適材)、**いちいがし**(櫓や農機具を作ると良い)、**あらがし**(農機具の柄、薪炭にする)、**うばめがし**(鰻を焼くにはこの炭を用いる)、**くぬぎ**(最上の池田炭になる。建築材、下駄の歯にする)、**しらかし**(車輪や建築、船の櫓、造船材に用いる)、**オホバカシワ**(薪炭材)、**カシワ**(薪炭にすれば火力が強く上質)、**あかがし**(日本産の材木中最も堅く、車輪、下駄の歯、炭にする)、**クリ**(耐水性があり建築、鉄道の枕木として良材である)、**はこやなぎ**(材は白く美しい。小箱やマッチにする)、**ポプラー**(材は白く、主にマッチ製造用)、**ほそばこりやなぎ**(皮と取り流水に晒して行李を編む。有益な産物で但馬産が有名)、**おほすだれやなぎ**(湿気に弱く建築用材に不向き。マッチにする)、**うつき**(材は肉空で堅く折れにくい。木釘、画箱を作る)、**したん**〔紫檀〕(古来貴重な輸入木材。卓、机棚、箸など多用途)、**シロツブ**(念珠にする)、**でいご**(製板、指物の材にする)、**ロヒニヤスードアカシヤ**(船釘にする)、**あかなつふぢ**(茎は籠など用途多い)、**イヌエンジユ**(成長が早く植林すれば益がある。木材は様々な用途がある)、**エンジユ**(堅く木理が美しい。器や建築材)、**じやけついはら**(実で数珠を作る)、**さいかち**(木材は堅く、種々の器具、三弦の胴や造船の木釘に用いる)、**ふとみ**(秋に葉を刈り乾燥させて筵にする)、**ネチキ**(枝を炭にして漆器を研磨に用いる)、**えごのき**(成長が早く木理が細かく漆器地を作るとよい。雨傘のロクロを作る)、**はくうんぼく**(彫刻材料、傘のロクロを作る)、**あさがら**(足駄を作る)、**ムシカリ**(質堅微で美しく用途多い)、**ハクサンボク**(用途多い)、**カンボク**(古方に外科で用いた。木材で歯ブラシを作る)、

はしどい（堅硬で長く朽ちない。アイヌはこれを建材にする）、コバノトネリコ（樹皮と木材は様々に用いられる）、オレイフ（欧米人は柔らかい果実の塩漬けにした物を好む。成熟した実を搾った油は食用として最高級。上等な石鹼、機械の潤滑油、魚肉の油漬けに用いる。材質は硬く器具や箱類を作る）、ひいらぎ（白色で模様があり印材や寄木細工に用いる）、キリ（箱類を作るのに最適で、衣類筆筒長持、琴、火鉢、下駄など用途が広い）、ブトウガキ（上等の柿渋が作れる）、ひめびし（殻を焼いた灰は香炉やたばこ盆、火入の灰に用いるとよく火を保つ）、ごぼうあざみ（老いた葉は発火の料に用いる）、ほくちあざみ（花を発火のホクチにするのでこの名がある）、きく（花の乾燥させた物を枕に詰めるとよい）、あかえぞまつ（良材）、あさだ（堅く粘りがあり裂割しにくく雪車・船具の材、薪炭にする）、しこたんまつ（建材、電信柱にする）、中（草茎を夏土用前に刈り灰にまぶして乾燥させ、蓆に織る。三備、近江、加賀が名産）、コヒケ（この草で織る蓆をコヒケ表、中ツギ表をいう。備後の特産）、しょうりん（簾にすれば美しい）、しちたう（利益の多い農産物の一つ。琉球表の材料にし、水田で栽培することが多い）、ふとい（蓆を織る材料になる）、くず（茎を水にさらして籠類を編む）、やぐるまさう（葉を夏に採集して乾燥し、タバコに加えて製すれば、臭気なく区別ができない）、われもかう（根を乾燥させて碎き艾のようにして磁器に穴を開ける『本草綱目啓蒙』）、かなくぎのき（堅く、鞆を作る）

3-3 「観賞・趣味」 337件

(1) 鑑賞（庭木、盆栽、瓶花など） 内：瓶花、盆栽 41件 庭木 93件

植物への関心は、花を愛でて鑑賞し楽しむ趣味が念頭にあったことがわかる。ただ花壇に植えて栽培に適するだけでなく、茶室に活けるなど瓶花や盆栽といった生活を飾るのにふさわしいもの、また庭園に植樹して趣を鑑賞する良さ、垣根や防火林に適しているなど、ここでも多岐に亘る利用の仕方が挙げられる。この背景には、かなりの部分に西涯自身の実生活での経験が反映すると思われる。

○観賞用として挙げるもの

あのもとさう（庭園栽培）、はこねぐさ（観賞用に庭園栽培）、かたひば（観賞用に栽培）、くらまごけ（観賞用に庭園栽培）、きうろうきんせん（盆栽）、ひやしんと（広口瓶に球根を入れ、瓶の底から3分の2ほどに木片か彩色ある石を入れて球根を支え、発根部ぎりぎりまで水を入れ、暗所で発根させる。瓶は水栽培用の特殊な物がある）、おりづらん（観賞用栽培）、やぶらん（観賞用に庭園栽培）、はうちやくさう（観賞用に栽培）、をもと（観賞用に栽培する。また盆栽）、ヒアシント（観賞用に栽培）、こまかたけくろゆり（観賞用に栽培）、ささゆり（観賞用に栽培）、てつはうゆり（観賞用に庭園栽培、瓶花、盆栽）、ワスレグサ（観賞用に栽培）、たまがはほととぎす（観賞用に栽培）、しやうじやうばかま（観賞用に栽培）、きんこうくわ（観賞用に栽培）、たちてんもんどう（観賞用に栽培）、いてふ（観賞用に庭園に植樹。深秋初冬の黄色い落葉は美しい。広い庭園に必需）、はいびやくしん（庭園に栽培、瓶花、広い庭園に必需）、はいねず（観賞用に栽培）、朝鮮おきなまき（観賞用に栽培）、朝鮮まき（庭園観賞用）、いちい（庭園で観賞用に栽培）、ふいりなぎ（観賞用に庭園栽培）、こめつが（観賞用に庭園栽培）、てうせんがや（観賞用に栽培）、かまくらひば（観賞用に庭園栽培）、ちやほひば（観賞用に栽培）、しのぶひば（生垣にして観賞用に栽培）、ひめむろ（観賞用栽培し庭園の生垣にする）、くろべ（観賞用に庭園栽培）、このてがしは（庭園の生垣にする）、ヒメスギ（密に植えて籬にする）、フランスかいがんまつ（観賞用に栽培）、からまつ（観賞用に庭園栽培、街路樹に良い）、ごえふまつ（観賞用に栽培）、はひまつ（近年は観賞する者が多い）、くろまつ（観賞用に植えることが多い）、あかまつ（観賞用に庭園植えることが多い。盆栽として各種草木中最も有用）、からたち（この樹で籬を作ると良い）、ベンガルストロン（盆栽にすれば結実し、馥郁たる芳香を楽しめる）、ほしざきききやうなでし（観賞用に栽培が容易）、ふるつくす（観賞用に栽培、瓶花）、くさけふちくたう（観賞用に栽培）、はりあさがほ（観賞用に栽培）、びじようざくら（観賞用に庭園栽培、盆栽としても美しい）、るかうさう（観賞用に栽培）、さくららん（観賞用に栽培）、たうわた（観賞用に栽培）、いよかづら（観賞用に栽培）、ふなわらさう（観賞用に栽培）、くさたちばな（観賞用に栽培）、ろくをんさう（観賞用に栽培）、ちやうじさう（花の色は鮮麗で観賞用に栽培）、せんぶり（花は雅致で鑑賞の値がある）、つるりんどう（観賞用）、はなかんざし（花壇の縁を飾ると良い）、くされだま（観賞用に庭園栽培）、さくらさう（観賞用に多く栽培）、いはうめ（盆栽）、いはかがみ（観賞用に花葉共に美しい）、あかはないちやくさう（観賞用に栽培）、うめがささう（観賞用だが栽培が至難）、

かんあふひ（観賞用に栽培）、けいとう（観賞用に栽培）、せんになこく（観賞用に栽培）、おしろいばな（観賞用に栽培）、いぬしゅうろちく（庭園に植えると雅趣がある）、しゅうろちく（観賞用に栽培、盆栽に）、とうしゅうろ（観賞用に庭園で栽培）、ホテイチク（観賞用に栽培）、しの（生垣を作ると良い）、かんちく（観賞用に栽培）、むらさきだけ（観賞用に庭園に植える）、をおしまそてつ（観賞用に庭園で栽培）、クロツグ（盆栽にし、花を付ければ美しい）、こまつなぎ（観賞用に栽培）、ひよくひば（観賞用に庭園池辺流水の辺に植えれば趣がある）、むらさきしぶき（果実が熟して紫になった物を瓶花にする。庭園に栽培）、ランターナー（観賞用に栽培）、ごむのき（近年は盆栽として観賞）、びやくしん（観賞用に庭園栽培）、すいせんのう（花の色が美しく広く庭園で栽培）、がんび（観賞用に園庭栽培）、せんのう（観賞用に栽培）、えんびせんのう（観賞用に栽培）、しゅすらん（観賞用に栽培）、オホイハチドリ（観賞用に栽培）、あをすずらん（観賞用に栽培）、こいちえふらん（観賞用に栽培）、みやまちどり（観賞用に栽培）、だいさぎさう（観賞用に水盆中で栽培。花形は奇にして美麗である）、せきこく（観賞用に栽培）、さわらん（観賞用に水盤中で栽培）、すずむしらん（本島産蘭科の中で美花）、あをちどり（観賞用に栽培）、ふうらん（観賞用に栽培）、ほくろ（観賞用に栽培）、ムエフラン（観賞用）、かやらん（花形愛らしく鑑賞）、うくいすのき（盆栽にして花時、実の紅熟を観賞）、しば（庭園に植えて美観。公園などに植えると良い）、かうらいしば（庭園に植へて美観。公園などに植ると良い）、めがるかや（花は秋に瓶花）、はなめうが（観賞用）、バナナ（観賞用に栽培）、いちはつ（観賞用に栽培）、モンドプレシア（各地で観賞用に栽培）、パリン（観賞用に栽培）、ひあふぎ（観賞用に栽培する。花に紫の点がない物は貴重）、すいせん（観賞用に庭園に植える）、さふらんもどき（観賞用に栽培する。花は大変美しい）、くすどいけ（観賞用）、イイギリ（観賞用に栽培。冬に紅熟した物を仏前に供える）、にはうるし（街路樹で路傍に植えれば夏の暑さを防ぐ）、ハゼ（盆栽にして秋に紅葉を観賞）、ふしのき（近年盆栽にして紅葉を観賞）、ちやらん（観賞用）、ぎよりう（観賞用に栽培。葉花共に美しい）、ナンテン（庭園、盆栽、実を付けた枝は冬春に瓶花に優れる）、ヘビノボラズ（瓶花）、めぎ（観賞用に栽培）、ヒラギソヨゴ（生け垣に良い）、たまみづき（旧暦7月7日に葉を取って実を残して花瓶に挿す）、たらえふ（観賞用に庭園に植える。落葉が少なく四季を通して美しい）、もちのき（庭園に植えると四季を通して落葉が少なく観賞。防火用に植えると良い）、はしどい（庭園で栽培）、コシウバイ（観賞用に栽培）、白実ウメモドキ（秋に落葉しないうちに葉を取って花瓶に挿す）、あをき（防火用に植えると良い）、サンシュ【山茶葵】（瓶花に美しい。庭園栽培、盆栽）、またたび（花は葉を取り瓶花）、シヤラノキ（観賞用に栽培）、ヒササキ（さかきの代用にする）、サカキ（日本では神事祭典の必需品である。庭園に栽培）、サザンクワ（花及び樹形が美しく庭園に植え、瓶花、盆栽にする。生垣によい）、ツバキ（花は美しく冬から春にかけて瓶花には不可欠）、もつこく（庭園栽培し観賞、古来庭木で最も重んじられる。籬によい）、じやかうあふひ（観賞用に栽培）、ふゆあふひ（観賞用に栽培）、ぜにあふひ（観賞用に栽培）、はなあふひ（観賞用に栽培）、すなあふひ（観賞用に栽培）、ほうせんくわ（花に多数の品種がある。観賞用に栽培）、のうぜんはれん（観賞用に広く栽培）、あをぎり（観賞用に庭園栽培、街路樹に適している）、こでまり（観賞用に栽培）、かなうつき（花は美しく庭園に植える）、しroyまぶき（観賞用に栽培）、やまぶき（観賞用に栽培）、ビハ（花葉共に雅致あり。庭園に植える。花葉花瓶に挿すといひ香りがする）、あかめもち（観賞用に庭園に栽培、生垣を作るのに良い）、しやりんばい（観賞用に栽培）、はまなす（観賞用に栽培）、なにはいばら（観賞用に盆栽）、さんしやういばら（観賞用に栽培）、のいばら（秋に紅葉した物は瓶花）、ときんいばら（観賞用に栽培）、シデザクラ（観賞用に栽培）、くさぼけ（観賞用に栽培）、からぼけ（庭園に植え盆栽や瓶花にする）、いとかいどう（観賞用に栽培するのは海棠よりも多い）、かいどう（観賞用に広く栽培し、庭園には不可欠）、ニハムメ（観賞用に庭園に植える）、ユスラムメ（盆栽では花も実も美しい）、すもも（瓶花、生垣）、ぼうちのき（観賞用に栽培）、ちょうじざくら（観賞用に栽培）、しろざくら（観賞用に栽培）、ぢんちやうげ（観賞用に栽培）、きあま（観賞用に栽培）、あさぎさるすべり（観賞用に庭園に栽培）、びようやなぎ（庭園に植え、瓶花）、きんしばい（観賞用に栽培）、はしかん（観賞用）、そしんろうばい（冬の花瓶は最も清玩。冬に黄変した葉を二三枚残して開花に近い物を居室に供えるのは芳香雅致文雅に不可欠）、だんこうばい（観賞用に栽培）、イスノキ（観賞用に庭園に植える）、ときみづき（観賞用に栽培）、ひうがみづき（観賞用に栽培）、しやうじやうくわ（観賞用）、うきつりぼく（観賞用に栽培）、フソウクハ（観賞用。盆栽は大変美しい）、フヨウ（花壇、盆栽）、さねかづら（観賞用）、チューリップノキ（庭園へ植え観賞用）、をがたまのき（観賞用に栽培）、たいざんぼく（観賞用に庭園に栽培、瓶花）、ウケザキオホヤマレンゲ（観賞用に栽培）、オホヤマレンゲ（観賞用に栽培）、シデコブシ（観賞用に栽培）、もくれん（観賞用に庭園に栽培。冬に温室で開花した物を瓶花に販売）、

つるうめもどき（果実をつけた枝を採り瓶花）、つりばな（庭園に栽培する）、マサキ（垣根にすると美しい。庭園に植える。冬には実や葉を供え花にする。防火用に植える）、ふいりば【斑入葉】ザクロ（庭園に植えて観賞）、チャウセンザクロ（庭園に植えて花を観賞、盆栽で樹形の奇異を弄ぶ）、テンニクワ（観賞用に栽培）、シクンシ（花は美しく庭園に栽培）、グミ（盆栽、庭園に植えて観賞）、フウトウカツラ（観賞用に栽培）、ゴシキツタ（小さな物は盆栽にする。大きな物は山民が架橋の材料にする）、ガネブ（観賞用に栽培）、ツタ（秋の紅葉は美しい。人家に植えて壁を這わせて賞する）、ムベ（園芸家は近年盆栽にする）、みつばあけび（盆栽にした小木でも結実する）、カウシウウヤク（庭園栽培）キバナハウチハカヘデ（庭園栽培）、みやまもみぢ（庭園樹）、とうかへで（庭園樹）、ちやうじやのき（庭園樹）、かぢかへで（庭園樹）、うりはだかへで（庭園に栽培）、キツタ（観賞用に栽培）、やつで（多く庭園に植えられるが、佳木雅致あるものではない）、ミツナガシ（観賞用に栽培）、ボダイジュ（観賞用に栽培）、イヌブナ（庭園に植えて美観にする）、キフチ（観賞用に栽培）、ぎよぼく（観賞用に栽培）、ヤブサンザシ（観賞用）、ヤシヤビシヤク（観賞用に栽培）、こあぢさゐ（観賞用に栽培）、つるてまり（観賞用に栽培）、しろふ【白斑】あぢさい（初夏の頃の花は特別の色がある。鑑賞用に庭園栽培）、でいご（観賞用に栽培）、イヌアカシヤ（生け垣を作る）、ニハフチ（観賞用）、むれすずめ（観賞用）、あかなつふぢ（庭園に栽培し、棚を作り蔓を這わせる）、えにしだ（観賞用に栽培）、ハナスハウ（庭園に植えたり盆栽にしたりする）、キリシマツツジ（観賞用に庭園で栽培）、シャクナン（庭園、盆栽）、はくうんぼく（観賞用に栽培）、リウキウフジウツギ（観賞用に栽培）、ソケイノウゼン（観賞用に栽培）、ノウゼンカツラ（観賞用に栽培）、ふいりのつるにちにちさう（庭園に栽培）、シロハナキヤウチクタク（庭園に栽培し専ら花を観賞、盆栽も美しい）、オホデマリ（庭園で栽培）、サンゴジュ（観賞用に庭園で栽培。生籬にする。防火用に植える）、キンギンボク（庭園に栽培して観賞）、ウグヒスノキ（観賞用に栽培）、ヒキリ（観賞用に盆栽にして、冬は温室で霜を避ける）、アリドホシ（盆栽や庭園に植える）、ハクチャウケ（枝を刈りとり低籬にする）、クチナシ（瓶花、庭に植える）、はしどい（庭園栽培）、レンギヤウ（観美として庭園に栽培）、モウリンクハ【茉莉花】（夏に開花すれば香気が芬々とする。盆栽として優美）、ワウバイ（花は冬から春の盆栽に不可欠）、たまつばき（観賞用に栽培）、ひいらぎ（観賞用に庭園栽培）、ぎんもくせい（花は香が良い。観賞用に庭園栽培。盆栽は文人が愉しむ）、ごぜんたちばな（観賞用に栽培）、やまももさう（観賞用に栽培）、みづきんばい（観賞用）、やなぎらん（観賞用）、みぞはぎ（観賞用に栽培）、ともゑさう（観賞用に栽培）、つきぬきおとぎり（観賞用に栽培）、ごじくわ（観賞用に栽培）、ふもとすみれ（観賞用に栽培）、すみれ（観賞用や画題、詩歌にする）、フユイチゴ（寒中の盆栽にする）、かひざいく（観賞用に栽培）、みしをん（花瓶に挿すとき、茎が高くないので良い）、しをん（中秋の頃に秋草の一つとして瓶花にして飾る）、あさぎりさう（観賞用に栽培）、はんごんさう（花は深い黄色で優雅。花瓶に挿しても美しい）、きんけいぎく（広く観賞用に栽培）、きんせんくは（観賞用に栽培し、瓶花）、をぐるま（観賞用に栽培）、てんぢくぼたん（花は艶やかで花期が長く、栽培が容易なので観賞用に広く栽培）、ヒゴダイ（七夕の花瓶）、やまあぢみ（花は観賞用）、はごろもさう（観賞用に栽培）、こうりんくわ（観賞用に栽培）、ふきあげぎく（観賞用に栽培。20年を超える物を盆栽）、いそぎく（観賞用に栽培）、しほぎく（観賞用に栽培）、いんどごむのき（観賞用に栽培）、せんりょう（歳末から新年用に花瓶に挿して飾る）、つきぬきにんどう（観賞用に栽培）、くれおめさう（観賞用に栽培。茎葉共に一種の悪臭があり、花瓶に入れてはいけない）、ありつすむ（観賞用に栽培）、ひなけし（観賞用に広く栽培）、ふとい（観賞用に栽培）、てうせんあさがほ（花は観賞用に栽培）、さるびや（観賞用に栽培）、たてやまうつぼさう（観賞用に栽培）、おもだか（水盤に入れて観賞）、フリージア（観賞用に栽培。茎が短く盛花するが花瓶に入れることは難しい）、プレムラー（春初烈寒中に開花する。盆栽として鑑賞）、おおかまど（果実のついた物を選んで花瓶に入れる）、べにばないんげん（観賞用に栽培）、しろばな【白花】をのまんねんくさ（観賞用に栽培）、さはしをん（希に庭園で栽培）、いはれんげ（観賞用に栽培）、こまうせんごけ（観賞用に栽培）、まうせんごけ（観賞用に栽培）、もくせいさう（観賞用に栽培）、しのぶもくせいさう（観賞用に栽培）、あかばなだいもんじさう（観賞用に栽培）、とりあししようま（花は観賞用）、あわもりしようま（観賞用に栽培）、たいもんじさう（観賞用に栽培）、くさあぢさゐ（鑑賞用）、やぐるまさう（観賞用に栽培）、ぎんばいさう（観賞用に栽培）、われもかう（観賞用に栽培）、けふかのこ（観賞用に栽培）、しもつけさう（観賞用に栽培）、かざぐるま（観賞用）、しやくやく（牡丹に次いで美麗。花園に栽培し画題に多用）、せつぶんさう（観賞用に栽培。近年これを春の七草とするものが多い）、きんばいさう（観賞用に栽培）、えんごさう（観賞用に水盆や庭園池水中で栽培）、からまつさう（観賞用に栽培）、つはぶき（観賞用に栽培）、タマジサイ（観賞用に栽培）、

イボタ（広く生垣に用いる）、こまゆみ（庭園に栽培、盆栽）、とねりこぼのかへで（観賞用に栽培）

（2）趣味（情趣ある画題）9件

花については、審美眼から美麗で雅致があり絵画の画題に優れるとしたものがある。本書でも多くの写生画を描き、観察に精通したことを踏まえ、文人的な視点からも草花を見ていることが窺える視点である。茶を嗜み骨董にも造詣が深かった風流人でもあったことの反映として、これも本書の特徴的な記述である。

○情趣ある画題として挙げるもの

くろまつ（最も有用な画題の一つである）、つるりんどう（美術の画題として雅致がある）、いはかがみ（画として模様にて佳なり）、あかはないちやくさう、しうかいどう（花は画題になる）、すみれ（各種の堇は皆美麗、画題、詩歌にすることが多い）、れいし、しゃくやく（牡丹に次いで美麗。花園に栽培し画題に多用される）

西涯は風流を好み、金沢で開かれる茶会への出席も多く、趣味的な視点で審美眼が養われていたであろう。茶室に飾る茶花にして趣のある季節の花を意識していたようである。古美術品の売り立て目録を取り寄せ風流を好み、花瓶に挿して茶室に生ける花を意識していたことが背景にあったように思われる。

4. 本書「雑記」の分析と考察

「雑記」では、関連したトピックスになるような内容や歴史的な背景、和歌などを古典籍からの引用した内容が多く含まれる。そのような幅広い教養を意識した記述は、個々の解説の長さが限られた多くの近代植物書にはないので、「応用」と同様に本書を特徴付ける内容と言えよう。本書と比較した『大和』、『啓蒙』では近代植物書に比べて、そのような歴史的、文学的な関連が見られる点では近世本草書的な色彩が強い。本書では実学的な要素と教養的な要素を盛り込む独自の編集方針があったと考えられ、同時にそれらの記述に当たって諸文献に目を通した西涯の教養の広さもまたよくわかる。アマチュアリズムに支えられた西涯の教養の深さが窺える部分でもある。

引用された文献には、近世本草書や近代植物書の他に史書、歌集、歌論書、随筆など多い。別名や異名については、『啓蒙』からの孫引きも見られるが、中世以降に編纂された辞書が参照されていたことがわかる。引用のほとんどは和書だが漢籍も含まれるのは、幕末に儒学者宮永菽園の私塾で儒学を学んだ教養人の一面も見られる。また、近代の植物学書や図譜に加え、興味を持った雑誌や一般の書籍が含まれることも特徴であろう。

「応用」にも言えることだが、日常目にした書籍や、自身の趣味である園芸や茶の湯、骨董収集はもちろんのこと、植物採集登山、登山仲間からの伝聞といった情報源はたくさんあったようである。草稿の罫紙に細かな字で書かれた備忘メモや、罫紙の欄外に更に小さな字で書き込まれた内容を見ると、日頃から気づいたこと、面白いと感じたことは余さず書き留め、本書の執筆に利用していたことが想像される。専門的な知識を体系的に網羅することよりも、実生活に即して読者に対する「知っていた方が生活に豊かになる知識」を重視していたように思われる。内容には西洋のトピックや説話も含み、明治以降の新たな時代の文化に役立ちそうな内容を意識していたようにも思われた。

とは言え、引用部分には直接原典を参照したもの他に『古今要覧稿』（類書）からの孫引きや出典の記載が明らかでないものも含まれる。稗史にある諸説で事実の確認が困難なものには、現在の科学常識では否定されたり生活水準から見て、明らかな間違いや誤解が含まれていたりするのは仕方がないが、当時はそのような説も流布していた事実を知るといえる点では、史料的な意味がある。

記載内容の出典が示された引用文献は、傾向を示すため出典文献ごとに植物名を表2に示したが、それ以

外に部分的な内容の引用や、記述を参考にした文献は多いと思われる。

4-1 「雑記」内容とその特徴

雑記は内容の幅が広く、名称の由来、日本への輸入の経緯、歴史や文学的教養などを含む。また日本固有種に限らず、明治以降に西洋から輸入した外来品種の栽培や利用などの記載にも力を入れていたようである。それらは出典から直接引用しているものは少なく、内容をダイジェストにして紹介しているものが多い。

以下に「雑記」に書かれている内容を大まかに5つに分類し、内容の件数を集計した。1つの植物について2つ以上の内容が書かれるものもあるので、件数の合計は収載品数と一致しない。

書かれた内容を現在の視点から見直すことで、本書が書かれた当時の一般的な理解や知識水準の概略を知ることができる内容が含まれるとも思われるが、全文を引用して収録できないため、分類ごとに記述の指向や筆致を示した内容を〈事例〉として紹介し、特徴を考察する。()は漢字名、[]は現在の和名。

(1) 名称に関すること(語源、別名など)、日本への伝来(原産や栽培の歴史、経緯など) 63件

日本固有種だけではなく、明治以降に日本へ伝来した植物について触れた内容も多い。農作物では原産国や栽培地域などの知識を加えているものが見られる。名称については、語源や別名にも触れている。

〈事例1・語源〉ケンボナシ [ケンボナシ]

越中ニテ手指ノ屈シテノビザル者ヲ「テンボ」と呼ブ。此実ノ形チ又指ノ屈シテノビザルニ似タルヲ以テ此名アリ、又支那ニ癩漢指頭と云フ、皆同意ナリ。

〈事例2・語源〉ふうちさう(風知草) [ウラハグサ]

此草ノ節ヲ見テ其年大風ノ有無ヲ占フ説アリ。茎ニ節アレバ大風フク、其節茎ノ基部ニアレバ春、中央ニアレバ夏秋、梢ニアレバ冬ニ、又二節アレバ二度ノ大風アリ。節ナケレバ其年風災ヲ来タスコトナシト占フト云。是レニ依リテふうちさうノ名アリ。

〈事例3・伝来/語源〉はぼたん/たまなかんらん(球菜甘藍) [キャベツ]

はぼたんハ古ク日本ヘ渡リ、原オランダナ又三年菜と云フモノ是ナリ。はぼたんノ名ハ或ハ徳川氏時代中頃園芸家ノ名セシモノナラン、而シテ単ニ観賞品ニ供シ之ヲ食スルコトヲ識ラズ。之ヲ食スルハ近年洋食ノ流行ニテ初テ試食シ今は(欠字)ニ大イ栽培、食料トスルニ至レリ。

〈事例4・伝来〉コーウヒ(珈琲) [コーヒー]

珈琲ハ西暦紀元前八百七十五年ノ頃早く已ニ波斯人之ヲ飲用セシニ濫觴シ、亜拉比亜人ニ伝ヘギリシヤ土耳其等諸邦ニ(欠字)セシモノナリ。日本ヘ伝ヘシハ詳カナラズモ、其樹苗ハ明治二十二年三月琉球八重山群島中、西表島石垣島等へ播種セシモノ。同二十七年ニ至テ樹幹高サ五尺余長シ初テ結果セリ。是レ日本ニ於テ珈琲樹苗ヲ栽ヘシ初ナラン⁽¹²⁾。

〈事例5-1・伝来〉桂樹(肉桂) [シナモン]

享保十年東京種ヲ駿河府中ノ官園ニ伝ヘ之ヲ繁殖セシメ、元文三年ニ諸国ヘ伝植セシモノナリ⁽¹³⁾。

〈事例6-1・伝来〉いちじく(無花果) [イチジク]

此樹ハ寛永年中西南洋ノ種ヲ得テ長崎ニ移植ス。是日本ヘ初テ伝ヘシ時ナリ。

〈事例7・伝来〉カズラリア⁽¹⁴⁾ [トクサバモクマオウ?]

此樹は日本に於て産せず、原産地は喫太利⁽¹⁵⁾にして熱帯地産。今より三百余年前に駿河国府ニ徳川家康植物園を開きし時に洋人園に移し植しものにして、今静岡城南に或民家と東京ノ植物園に一株ツツ存在す。甚珍なるものなり。静岡ニ有るものは雄株にして幹大なるも東京植物園に有るものは雌木にて其幹小にして半に足らず。

(2) 生態や生育状況、産地、品種に関連する内容 37件

農産物の生育や栽培に関する内容が多いように思われる。〈事例8〉は〈事例4〉と同じ時期に日本に伝来して栽培試験が行われていたことを窺わせるが内容だが、事実関係の確認は今後の調査を待ちたい。

〈事例6-2・生育〉いちじく（無花果）〔イチジク〕

無花果ハ其性水ヲ好モノト見ヘテ水ニ樹影ノ写ル処ニ栽レバ果実ヲ結ブコト多シト云フ。下水ノ浸出スル処ニ植レバ最も早く生長シ、且多ク結実ス。

〈事例8・生育〉きな（幾那）〔キナ〕

日向飽豊熱帯植物試験場ヨリ明治二十二年琉球八重山群島中、西表島石垣島等へ移植セシモノ能ク成長セリ。明治二十七年ニ至テ五尺余ニ及ブアリ⁽¹⁶⁾。

(3) 関連する伝承。歴史的、文学的な内容（和歌や随筆などへの引用） 20件

同じ名称でも時代によって違う植物を指している場合もあり、本草学では別名や異名の整理や名称の歴史的な経緯を明らかにしようとする名物学的な研究が行われてきた。植物と名称を正確に同定することは、生薬を扱う本草学では非常に重要な知識だったからである。一方それは植物を愛でる園芸でも必要な教養であり、風流を大切に花の季節感や異名を技巧に取り入れる文芸との関わりでは、和歌の教養に本草学の視点が加わる。江戸後期には『万葉集』に詠まれた動植物を対象に研究する『万葉動植考』（伊藤多羅）が書かれたり、逆に本草学では、和歌や漢詩に詠まれた植物を集めた物産会が開かれたりしている。

本書で『万葉集』や私家集にも詠まれている植物の紹介が散見されるのは、西涯は園芸にも造詣が深くこの分野に関心が高く、関連する情報を重要な教養と考え、様々な植物が歴史的、文化的に利用されてきたことを紹介する意味もあったと思われる。背景には、『枕草子』、『源氏物語』、『菅家文草』などにも触れる、西涯自身の文学的な教養の高さも窺える。

〈事例9-1〉ぐみ（胡頹子）〔グミ〕

ぐみのきヲ以テ杖ヲ製シ用ユルコト菅家文章卷之一ニ茱萸ノ杖ヲ載ラルル⁽¹⁷⁾ヲ見レバ日本ニ於テ久シク之ヲ用ヘシコトヲ識ル可シ

その他には、植物にまつわる伝承の紹介には、〈事例9-1〉に続けて当時知られていたらしい真偽不明の民俗的な内容の引用や、自身の見聞、海外の伝承やトピックスも紹介しており、明治以降の刊行物にも目を通し、気になった内容はメモして情報を蓄積していったようである。

〈事例9-2〉ぐみ（胡頹子）〔グミ〕

あきぐみモ樹皮ヲ煎服シテ死たる者アリ。其形科ハ煎汁ヲ飲タル後数時間ヲ経テ顔色変ジ、強熱シ胸痛甚シク草綠色ノ液ヲ吐キ兩便共ニ秘結シ医薬効ナク五六日間苦シメ続テ死タリ。

〈事例10〉びわ（枇杷）〔ビワ〕

枇杷ハ久しきを経ザレバ実ヲ結バズ。故ニ俗間ニ説アリ、之ヲ栽シ人死セザレバ其樹実ヲ結ハズト云フ。此樹ハ大略下種後一二年ニシテ結実ス。故ニ此ノ俗説ノ由テ来シナリ、信スル足ラズ。

〈事例11〉きみかげさう（君影草）〔スズラン〕

此草ハ英国ニテ士女ノ為ニ幸福ノ復帰ヲ意味スル花トシ愛セラルルコト多シ。之ヲ襟ニ夾マレ帽ニ飾ラレ用ユル所多シ。（中略）古昔レオナードと呼ぶ勇士深林中にて火龍と健闘しこれを斃したる時受けたる傷より清き血液を流せし其痕に生したる草なりと云神話⁽¹⁸⁾あり。

(4) 生活の利用価値に関連する内容 29件

薬効や食用・生活材への利用に関する情報は、ほとんどは「応用」に書かれるものであるが、〈事例6〉の「イチジク」に書かれた「雑記」には伝来・生育・利用価値が混在する。厳密に分けられていない事例でもある。

〈事例6-3・利用価値〉いちじく（無花果）〔イチジク〕

果実ハ滋養緩和瀉利ノ効アリ、故ニ居常便秘ヲ患フル人之ヲ食スレバ緩下ノ効アリ。又洩利ヲ止メ痔咽喉ノ痛ヲ治ス。生葉ハ湯ニ煎シ痔痛ヲ頻リニムシテ後ニ之ヲ洗フ、之ヲ治スルノ効アリ

(5) その他 (1)、(2)、(3)、(4) に分類し切れない様々な雑学知識や筆者の感想など 124件

「雑記」の中で、最も多くを占める内容である。『延喜式』の記載が多いのは特徴的だが、日本で古代から薬用、食用に利用されてきたことを歴史の中で確認しておきたい思いがあったのかもしれない。記紀万葉についても同様で、古代から生活の中で親しまれてきた植物であることを重視しているようである。それ以外には、西涯自身の体験や日常で見聞した挿話のような内容が含まれる。現代の科学知識、常識の視点で見た正誤の指摘とは別に、当時の生活や社会常識が浮き出てくる資料でもある。

〈事例5-2・伝来〉桂樹（肉桂）〔シナモン〕

印度世倫島ニ桂樹ヲ産スルコト多シ。一大産物タリ。毎年時季ヲ期シテ桂樹ノ皮ヲ剥グコト有リ。此樹皮ヲ剥グ人夫ヲ同島ニ於テ最モ下等ノ賤役ト見做シ是人夫ヲ見ルコト日本ノ（欠字）ト同シト云フ。豊後ニテハ植樹後二年ヨリ三十年ノ間モノヲ伐截シ其皮ヲ剥キ薬用ニ販売ス。其ノ残りタル幹枝ヲ薪材トナス。土佐ヨリ出ル桂皮ハ最モ上等品ナリ。

〈事例12〉すもも（李）〔スモモ〕

此樹、性長寿ニシテ枯ルルコトナシ。予ガ家ニ百数十年ヲ経タル樹アリシニ果実ヲ結フコト少シモ衰ルコトナシ。

〈事例13〉カハヤナキ（水楊）〔ネコヤナギ〕

絮ヲ採リ硯下ニ漉スレバ冬凍ラズ。之ヲ文房春風膏硯と名クト物類相感志ニ見タリ。

〈事例14〉アキニレ（野榆）〔アキニレ〕

英国ケントに今現存するブラボーン榆樹は有名ナルモノニシテ既ニ参千年ヲ経タル老樹ニテ世界ニ於ケル最古ノ樹タリと云フ。

〈事例15〉あし（蘆）〔アシ〕

浜荻ハ伊勢国三津村南ノ入江ニアリ。五十鈴川ノ末昔鷺ガ森を中嶋ニナシタル入江ニ生セリト云。皆片葉トナルト云（勢陽雜記）今ハ此地方ハ皆耕地ト変セリト云。

〈事例16〉はひまつ〔ハイマツ〕

此樹間ニ松ライテツ遊棲シ其新芽ヲ食セリ。余先年立山ニ於テ松鷄ヲ捕獲シ其腹中ヲ割キシニ中ニ多ク新松芽ヲ得タリ。

その他にも、農作物などに単位生産量や金銭的な数字を挙げるものがある。年度等は不明だが、農業関係資料からの統計表を参照⁽¹⁹⁾して転記したものと思われる。農産物への関心の高さや記述の豊富さが本書編纂の方針の一つと見られることは他でも触れた⁽²⁰⁾が、関心は栽培方法だけではなく、農業生産にも向いていたことがわかる。

〈事例17〉カポック綿花〔カポック〕

今四十四年（註一明治44〈1911〉）爪哇バタビヤに於て一担（註一約60kg）の価十七円六十銭乃至二十円八十銭にして日本へ輸入四百二十担（註一約25.2 t）

その他に、前述「2-4-5 えんどう」で引用した「豌豆通常壺石三十九貫目（註一約812 g/l⁽²¹⁾）」、「2-4-4 こむぎ・おおむぎ」に引用の「大麦一石ノ目形通常二十七貫目（約g 562/l）以上三拾四貫目（約708 g/l）ニ及ブ。裸麦は一石三十三貫目（約687 g/l）ヨリ三十八貫目（約792 g/l）ニ及ブ」、「通常大豆は一石三十八貫目」、「通常をたふくまめ一石は目方三十五貫目（約729 g/l）」、「ささげ〔大角豆〕は一石三十八貫目」「玉蜀黍は通常一石三十八貫目」など同様の記述がある。

「雑記」の記載には、伝承も含め参考文献の記載をそのまま引用している部分も多いようで、内容の正誤には歴史的な事実関係や科学的な裏付けが必要であろう。曖昧さがあるとは言え、これだけの記載のために

は、常に好奇心を持ちながら、面白いと思った事柄を忘れないうちにメモして情報を集めた過程が想像される。例えば、〈事例16〉でハイマツについて書かれた「余先年立山ニ於テ松鷄ヲ捕獲シ其腹中ヲ割キシニ中ニ多ク新松芽ヲ得タリ」などは、西涯自身の好奇心の旺盛さに驚かされると共に、それを書き残し教養として誰かに伝えたいという熱意が伝わる部分である。

まとめ

本書は、序文にあるように当初「在来種・外来種を含めた日本中の植物の戸籍簿」を意図して始められたが、途中で植物以外に対象範囲を広げて編纂が進められたと考えられる。結果として、この範囲の拡大が本書の「近世本草書」的な性格を強くした。書名を「大日本本草」としたことも、西涯が最終的に目指したものが近世の博物的な内容の本草書の延長上にあったからだと思われる。

そして、今回近代植物書との比較から、本書の内容には明治以降に西洋から伝来した植物や外来品種の栽培に関する内容も多く含まれることが明らかになった。ここからは、本書が単に近世本草書の増補ではなく近世本草書の実学的な産物に関連する内容に軸足を置きつつ、近代植物学の観察眼と分類の記載を加えていった点では「近世本草書の進化形」と位置付けることもできるだろう。

次に、小論では「応用」と「雑記」を、広く知識や教養の普及に資する本書の特徴的な記載と見てきたが、それが書かれている植物が全体の二割程度なのは少ないようにも思える。登山に関心が高かった西涯は、度々立山や医王山で植物を採集しているが、高山植物はほとんどその記載対象になっていない。これは恐らく山野草や高山植物は、古典文献や近世本草書でも日常生活への具体的な利用がほとんど確認できず、また観賞用に平地では容易に栽培できないものだからであろう。

しかし「応用」の書かれていない植物が蔑ろにされているわけではない。本書は「実用」だけから植物の活用紹介が目的ではなく、飽くまで国内に存在する植物の記載と平易な解説、関連する教養の普及を意図するものであったと考えられるからである。むしろ本書が、直接生活に利用されず園芸用に栽培できない高山植物や多種類の近隣の雑草類にも目を向けた観察と記載によって作られたことにも価値があると考えられる。それは、採薬を通して植物相を記載した近世本草学者や黎明期の登山を通して博物学的な山と人の関わりを築いていった登山家たちのそれに互すものであろう。

本書は、近世本草学が蓄積してきた知識分野が近代科学の研究手法を得て分化、専門化していく時代の過渡期にあって、西涯の植物に関する多様な価値観を交えた集大成として、本草学と近代植物学のハイブリッドを目指した著作であろう。そう考えると、そこに植物を中心にした天産物全般を対象とした実用書、実用的な教養書、農書としての性格を兼ね備えた本書の独自の価値が見えてくる。

また、本書を特徴付ける「応用」、「雑記」の内容は、明治末から大正初期の一般生活での植物利用の実態を記したタイムカプセルでもあろう。外来植物の伝来時期や訳名、和名の揺れ、国内での栽培状況といった当時の生活と植物活用の情報は同時代の視点で書かれた生活文化誌の資料でもあり、西涯が採集して記載した当時の立山や南砺地方の植物相の資料でもある。

本書がこれまで埋もれたままであったのは非常に残念なことであったが、今後、西涯の人的交流や社会的業績を併せて様々な視点から分析して活用し、その価値が生かされることを期待したい。

【謝 辞】

本書草稿をご所蔵の松村壽氏からは、引き続き借用、活用に格別のご理解ご高配をいただきました。深く感謝申し上げます。

【註】

(1) 拙稿「南砺市旧福光町松村家所蔵の『大日本本草』について」(富山県立山博物館『研究紀要』29号、2023) 参照。

- (2) 富山県立山博物館令和5年度後期特別企画展「越中立山の近世本草学一何でもあり！あふれる探求心―」で高山植物の写生画を中心に関連資料を展示した。
- (3) 前掲拙稿に、序文と緒言全文の翻刻がある。
- (4) 「とどまつ」に「うっぷ（アイヌ語）」、「くまのみづき」に「ウトニカ（アイヌ語）」、「かつら」に「ランゴ（アイヌ語）」の名称が付けられている。
- (5) 前掲拙稿39～41頁参照。
- (6) 「あづまいちげ」[アズマイチゲ]、「さるもも」(彌猴桃) [キウイ] は、福野農学校（現南砺福野高校）所蔵の標本を元にした旨の記載が欄外に書かれている。植物についての照会などで交流があったことが推定される。
- (7) 序文の日付から、天保14年には草稿が完成していたことがわかる。明治になってから田中芳男により刊行されたものである。
- (8) 『帝国植物学提綱』では、指標となる植物を「模範植物」として次の6つの基準で、以下を収載している。
 - ①「自国ノ粹ニシテ古来邦人ノ注意ヲ惹ケルモノナル。」、②「特質明亮ナルモノナルベシ。」、③「同類ニ属スルモノノ模範タルニ足レルモノナルベシ。」、④「人生ニ有用ナルモノナルベシ。」、⑤「親炙ノ便多ク、其發育及生活ノ状ヲ観察シ易キモノナルベシ。」、⑥「容易ニ其多数ヲ採集シ、若シハ栽培スルコトヲ得ベキモノナルベシ。」
 収載する植物は「むめ（梅）、さくら（桜桃）、あぶらな（蕪薑）、しゆんらん（春蘭）、たんぽぽ（蒲公英）、かへで（槭）、むまのあしがたさきんぼうげ（毛茛）、おほむぎ・こむぎ・いね、糸んどう（豌豆）、あかまつ（赤松）、おにゆり（巻丹）、くり（栗）、わらび（蕨）、すぎな（間荆）、すぎごけ（土馬踪）、ぜにごけ（地銭）、まつだけ（松茸）、くろぼ（麦奴）、かび（黴）、あをさ（石蓴）、あをのり（青海苔）、あおみどろ（水綿）、珪藻、かぶとごけ、ばくてりあ（黴菌又細菌）、もうせんぐさ又まごのて」。
- (9) かさみ草は「香散草」の意。順徳院の歌「山里の軒端に咲けるかさみ草色をも香をも誰見はやさむ」、かばい草は「香栄草」の意。「み山にはみ雪降るらしなには人うら風しぼるかばいぐさかな」を引用している。
- (10) 『古今要覧稿』「草木部 松一」には「松ハ尾張国尾津の崎の一松を日本武尊の御覧して人にありせば太刀はけましをとよませたまひしを古事記／日本書紀はじめとす、その後朱鳥四年九月紀伊国温泉に行幸ありし時、小松が下の草をかりさねとよませ給ふは天皇御製の始といふべし 万葉集」とある。尾張国尾津の崎は現在の三重県草津市多度町。『古事記』には、日本武尊が東国平定に向かう際尾津の一つ松のもとで食事をとったとき刀を忘れたが、帰途の途中にその松の下に忘れていった剣がそのまま残っていたことに日本武尊が「尾張に 直に向へる 一つ松あはれ 一つ松 人にありせば 衣着せましを 太刀佩けましを」と詠んだと伝える。又『万葉集』の歌は「わが背子は仮廬作らず草無くは小松が下の草を刈らさね」（中皇命『万葉集』一卷11）を指す。
- (11) 西涯の抜き書きには、引用部分に「信濃博物学雑誌第22号中二北野某の記」とある。22号に収載の上野卯三郎の報文「蛭及蚯蚓（承前）」を指すものか。「信濃博物学雑誌」は、明治35年6月に発足した信濃博物学会の機関誌として創刊、大正2年39号まで刊行された。
- (12) 日本でのコーヒー栽培は、明治8年にジャワ島から苗木を取り寄せたものが枯死し、その後明治11年に小笠原に移植し明治14年に結実したのが最初とされる。
- (13) 『白井光太郎著作集 第一巻』225頁参照。白井光太郎は肉桂の渡来について、中国僧の心越が天和元年（1881）に江戸へ来て、持ってきた肉桂の種子を小石川と小梅の水戸藩邸に植えて苗が生じたことを初めとし、その後幕府は享保年間に中国から「東京種」の肉桂の苗を取り寄せ小石川薬草園、伊豆七島などに家繁殖させた物を紀州、土佐、九州などで国産化したとしている。西涯の記述は後者が元になっているようである。
- (14) 西涯が見出しにした名称カズラリアは「casuarina」を指すと思われる。この記述の出典は、本書の欄外に雑誌「日本及日本人」653号（大正4年3月）とある。当時はこの事例のような説があったということであろう。
- (15) この植物の原産はオーストラリア（濠太刺利）である。「奥太利」はオーストリアの漢字名だが、これは西涯の見間違いによる誤記であろう。
- (16) 南雲清二「キナの国内栽培に関する史的研究」（『薬学雑誌』131号、2011）によれば、日本で初めてのキナ栽培は、明治9年にジャワ島から苗木500本を取り寄せ小笠原に送られたもので、これは明治11年に枯死。その後インドから種子を輸入し温室で発芽させ鹿児島、沖縄に植え付けるなど、明治16年までに3回の種苗導入を行ったが、明治17年にはほとんどが枯死したとある。その後明治34年、台湾に恒春熱帯植物殖育場を設立して栽培が試みられたという。本書の記述は、これとは別の事業とも考えられるが内容の出典が不明であり、場所と時期の事実関係には今後の研究が必要である。

- (17) 『菅家文草』は菅原道真の漢詩集。その巻之一所収の七言律詩「九月侍宴 賦山人獻茱萸杖 應製」の首聯に「萸杖肩舁 入九重」とある。
- (18) 最も古いフランスの伝説では、559年に聖レオナルがドラゴンを追い払った時に流れた血の跡からスズランが生じたとする。イギリスにも同様の話が伝わる。
- (19) 関連資料の中に含まれるメモに「中央農事報 三十六年七月ヨリ十一月至毎月一冊ヅツ 全国農事会」の記載があり、そこから書き抜いた「稲作一反あたりの灌漑に要する水量」をメモしている例がある。農政に関心を持ち専門雑誌を取り寄せて情報を集めていたことがわかる。
- (20) 前掲拙稿24頁、27頁参照。
- (21) 一石は180ℓ、一貫目は3.75kgで換算。以下も同じ。

表1 西涯が参考にした近代植物書

| 編／著者 | 書名 | 発行 | 刊行年 |
|---------------|--------------|---------|-----------|
| 伊藤圭介 | 『日本産物志』 | 文部省 | 明治6～10 |
| 伊藤圭介 | 『日本植物圖説』 | 花繞書屋 | 1874 |
| 田中芳男等 | 『有用植物図説』 | 東京大日本農会 | 明治24 |
| 内務省博物館 | 『博物館列品目録』 | 内務省博物館 | 明13—15 |
| イーツ著／瓜生寅訳 | 『商業博物誌』 | 文部省編輯局 | 明治18 |
| 帝国大学理科大学植物学教室 | 『大日本植物志』 | 東京帝国大学 | 1900—1911 |
| 斎田功太郎 | 『応用植物学：中等教科』 | 文学社 | 明治26 |
| 斎田功太郎 | 『大日本普通植物誌』 | 大日本図書 | 明治30 |
| 牧野富太郎 | 『新撰日本植物図説』 | 敬業社 | 明治32—36 |
| 梅村甚太郎 | 『富士山植物目録』 | 東洋社 | 明治35 |
| 谷田部良吉校閲 松村任三編 | 『日本植物名彙』 | 丸善 | 明治17 |
| 宮部金吾関 川上滝弥 | 『北海道森林植物図説』 | 裳華房 | 明治35 |
| 齋藤賢道 | 『工業用植物繊維』 | 博文館 | 明治36 |
| 川原慶賀 | 『草木花実写真図譜』 | 前川善兵衛 | 不明 |
| 矢澤米三郎 | 『帝国植物学提綱』 | 金港堂 | 明治32 |
| 三好学 | 『実験植物学』 | 富山房 | 明治42 |
| 三好学 | 『訂正 植物学講義』 | 富山房 | 明治32 |
| 松村任三 | 『日光山植物目録』 | 敬業社 | 明治27 |
| 松村任三 | 『本草辞典』 | 敬業社 | 明治25 |
| 松村任三・藤井健次郎 | 『教科適用 普通植物図』 | 開成館 | 明治35 |
| 矢田部良吉 | 『日本植物編』第1冊 | 大日本図書 | 明治33 |
| 岡村金太郎 | 『日本藻類図譜』 | 岡村金太郎 | 1907 |

表2 書名別「応用」「雑記」に引用の植物一覧

※網掛け＝「応用」、網掛けなし＝「雑記」、() 内漢字表記は原文のもの

| ジャンル | 書名 | 本書に引用のある植物 | | | |
|-------------|----------------|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 格式 | 『延喜式』 | ねなしかづら(菟糸子) | やだけ | そばのき(山毛櫨) | れいし |
| | | たかとうだい(大戟) | | | |
| | | いぬかや | イヌザンシヤウ(崖椒) | ガンビ(剪夏羅) | ムベ |
| | | せり(水芹) | ひゆ(菟) | メウガ(藜荷) | たうしんさう(燈芯草) |
| | | やたけ(箭竹) | いよかづら | みどりいろはなしゆるさう | おにのやがら(天麻) |
| | | ゑんれいさう | はまびし(蒺) | きく(菊) | かんざう(甘草) |
| | | わうれん(黄連) | はまびし(蒺) | | |
| 歌集 | 『万葉集』 | ふじばかま(蘭草) | ひるがほ(旋花) | あさがほ(牽牛子) | かなむぐら(葎草) |
| | | ムクゲ(木槿) | イヌビハ(天仙果) | かへで(槭樹) | びし(菱) |
| | | じゅんさい(蓴) | このてがしは(側柏) | つぼすみれ | ぼたん(牡丹) |
| | 『古今和歌集』 | きつねのをがせ(石松) | マコモ(真菰) | シキミ(柘) | ツルマサキ(扶芳藤) |
| | 『言塵集』 | みぞはぎ(溝萩) | | | |
| | 『清輔家集』 | なづな | | | |
| 注釈書 | 『令集解』 | たうしんさう(燈芯草) | | | |
| 連歌辞書 | 『藻塩草』 | すみれ(堇) | あかき(猿滑) | | |
| 歴史書 | 『日本書紀』 | きんぎんれんか(金銀蓮花) | あをき | くすのき | さくら |
| | | さうじゆつ(蒼朮) | | | |
| | 『続日本紀』 | にんじん(人參) | | | |
| | 『元享積書』 | ボダイジュ(菩提樹) | | | |
| | 『先代旧事本紀』 | あさ | | | |
| | 『類聚国史』 | わた(草綿) | | | |
| | 『日本文徳天皇実録』 | ははこぐさ(母子草) | | | |
| 地誌 | 『勢陽雜記』 | あし(蘆) | | | |
| 物語 | 『源氏物語』 | やまぶき(棗堂花) | | | |
| 軍記物語 | 『源平盛衰記』 | センダン(梅檀) | | | |
| 歴史物語 | 『栄華物語』 | からなでしこ | | | |
| 随筆 | 『枕草子』 | ふじばかま(蘭草) | そばのき | へびいちご(蛇苺) | |
| 辞書 | 『下学集』 | コシダ | みかん(蜜柑) | | |
| | 『和名類聚抄』 | コシアブラ(金漆樹) | | | |
| | 『東雅』 | ふじばかま | | | |
| 神道書 | 『造伊勢二所太神宮宝基本紀』 | サカキ(楊桐) | | | |
| 儀式書 | 『太上法皇御受戒記』 | こんごうし(金剛子) | | | |
| 類書 | 『古今要覧稿』 | さはだつ | | | |
| 本草書 | 『本草綱目啓蒙』 | をもと(万年青) | ふじばかま(蘭草) | ふき(欵冬) | |
| | | リヤウブ | はいのき(山簪) | ひのき(篇柏) | カキ(柿) |
| | | おほいぬたで(草紅草) | ほくろ(春蘭) | るうださう | さるなし(獼猴桃) |
| | | やぶからし(烏菘苢) | シロダモ | ビハ(枇杷) | すいみつもも(水蜜桃) |
| | | ぼたん(牡丹) | タニウツギ(楊楨) | べにばなスヒカヅラ | コクチナシ(水栴) |
| | | シホヂ | さぼてん(霸王樹) | ふじばかま(蘭草) | ふき(欵冬) |
| | | つは | やぶまめ | なたまめ | ナベゲリ |
| | | うみすずめ | とらふ | うづらたけ | クハクハツガユ(妬妬) |
| | 『本草綱目啓蒙』 | フヨウ(木芙蓉) | | | |
| | 『結髪居別集』 | はごろもさう(老) | | | |
| 『本草一家言』 | こごめざくら | | | | |
| 『庖厨和名本草』 | しろなたまめ | | | | |
| 『日本産物誌』 | あらしぐさ | | | | |
| 医書 | 『頓医抄』 | にら(韭) | にんにく(葱) | やぶたばこ(天名精) | |
| 園芸書 | 『長生花林抄』 | やまつつじ | | | |
| 料理書 | 『四条流庖丁書』 | こごめざくら | | | |
| 近代植物書 | 『高山植物叢書』 | いはかがみ | | | |
| | 『博物之研究』 | カビリベス | | | |
| | 『普通植物誌』 | しの(篠) | | | |
| | 『普通植物図譜』 | やまももさう | しゆつこんやぐるまきく | | |
| | 『日本高山植物図譜』 | あかはなみやまうしゆきさう | ひめみやますみれ | てうじぎく | つくしせり |
| | 『大日本山学会報告』第62号 | サツコ杉 | | | |
| | 『植物学雑誌211号』 | をきばぐさ | | | |
| 日本叢書『家庭園芸談』 | レプリベダウム | | | | |
| 近代雑誌 | 『日本及日本人』 | 木黄麻(カズラリア) | | | |
| 近代写真集 | 『台湾写真帖』 | こちौरらん(胡蝶蘭) | | | |
| 漢籍 | 『春秋左氏伝』 | やまよもぎ | | | |
| 漢籍 | 『詩経』 | しやくやく(芍薬) | ふじばかま(蘭草) | | |
| 漢籍 | 『物類相感志』 | カハヤナキ(水楊) | | | |
| 漢籍 | 『西陽雜俎』 | なでしこ | | | |